

下る程、人の見上ぐる藤の花

我々もその通りで謙遜は人の美德であります、自らの位置が高まれば高まる程、財産が増えれば増える程、身を卑下る、此れをいふたのであります。先づかやうに考へて見ますと燃ゆる火、咲く花、照る月、悉く道徳的教訓を垂れないものはありません。月の話しをしました序いでに、申せば、月蝕のあるのは、圓い月ばかりが月のながめではなく、全く皆瞑の時が存すること、我等が順境にあつて又逆境に立つ時の用意をせねばならぬことを示すものとも見得ることで御座いませう。かやうに考へますれば自然界一として自己修養の師とならざるものやあると申してもよいのであります。若しも自己の天職を全うすることなくして地下の人となるやうな事がありましたならば眞に自然界に對してもすまないことでありませう。

宗教的觀察

次に宗教的觀察であります。何をか宗教的觀察といふ。此れは自然界を觀察して、宗教的生涯に入るといふのがそれでありまして、多く禪宗の人々に於いて見らるゝ所であります。即ち庭を掃いてゐた。すると細かな石が竹のさきに當つた時、豁然として大悟徹底した。或は月の夜に竹の影が、ひざはしを叩いてゐた。その動く影を見て悟つたといふのもある。又、東坡の如きは谿聲此れ佛の廣長舌相である、山の色の碧き色なる、此れ法身の說法であるといふ感じを懐いてゐた。

善導大師は花が咲いたのを見ても、波の音を聞いても、花は希有の色を顯はし、波は實相の音をあげてゐられるのであります。此れ等は實に自然界から受けました宗教的情操の發露の一端に過ぎぬのであります。誠に、我々にとつて見ますれば、物事の悉くが、一面から言へば總てが、妙法を

轉じつゝあるものと申さねばなりません。

世人は妙法と申せば必ず黄卷赤軸のなかにのみ説いてあるものだとするの
でありませうが、大いに然らずで、物事一として我等が心弦に觸れなば宗教
的情操を起さないものはない。即ち妙法を轉せざるものはない。たゞそれを
受くる所の機のことゝろ如何である。

自然は御覽の如く、何處々までもおつ開いてゐる。而もそのうちには無
上の寶を藏してゐるのであつて、それをとるとらぬは偏に吾人の心に任せて
あるのであります。即ち、美術的の傑作もありませう、宗教上の妙法も、道
徳的の教訓も、學術上の深奥なる真理も秘められてあるのでありませう。此
の事を萬一受けることが出来なかつたならば、此こそ猫に小判でありまして
世の中に於ける悲劇中、此れ程の悲劇はありますまいと思ひます。

我々は宜敷、自然界の寶庫をおつ開いて、そのうちから學術上の研究資料
を發見し、道德上の訓誡を見出し、宗教上の悅樂を味はねばなりません。此
れによつて大悟徹底も、亦容易であることがお分りになるのでありませうが、
要は、外にあるのではなくて、うち、吾れの心眼を開く開かぬにあるのであ
ります。即ち與へられたる寶をとつて我々が千載にも萬歳にも又と得ること
の出来ない幸福の原因とするか、それとも全く顧ることなくして不幸の境
に沈んで行くか、此の二た道しかないであります。諸君はその何れに與し
て行かんとせらるゝか、こゝに深い考慮を回ら 以て寸時も早く猛進せられ
んことを希うてやまないものであります。

相應

相應はこれ中庸の道

凡て物事には何につけ相應といふ事が大事である、衣服にも食物にも住居にも身分相應にすれば、他より之を眺めた場合にも誠に見事によく似合ふが身分不相應なのは、何處かに無理がある様で、不似合なものである。故に熟練なる刑事は、身分不相應な服装でもして居るものを一目でも視れば、何か裏面に罪惡が潜んで居りはしないかと注意するといふ事である。昔梅尾の明慧上人はあるべきやうといふことを吾人平素の訓誡として示された、又徳川家康はらしくせよといふ教訓を家臣に與へられたといふ事である。其言辭は寔に簡單であるけれ共、其趣旨は頗る深遠重大なものである。相應といふ事

は過不足のないことで、過ぎたのも、足らぬのも共に相應とはいはれない。されば相應は是れ中庸の道であつて、聖賢の教も、つまり是より外はない、明治天皇の御製に「世の中は高き卑しきは〴〵に身をつくすこそつとめなりけれ」と仰せられたは身分相應の道を守り、各自の職務に専心努力せよとの聖旨と仰がるゝ、又「思ふこと思ふがまゝになりぬとも身を慎まむことなわすれぞ」との御製は、順境に於てよく／＼身の程を考察し放縱驕奢に陥らざる様、深く留意すべしとの御教訓と拜せらるゝ。所謂君子は其獨りを慎むべきことである、「獨りのみ思ふ心のよしあしを照しわくらむ天地の神」と仰せらるゝ通り、實天知り地知るである、況んや業道如秤重者先率といふ因果自然の道理は、嚴然として毫厘の誤りはないから、吾人は其身分々に應じて大に慎みはげみて、身分相應のつとめを完うしなければならぬ。

相應

純一無雜

往生淨土論に與佛教相應とあるを曇鸞大師は論註に之を解釋して函蓋相稱の喩を示された、函の蓋と身とのガタ／＼して居るのは函蓋相稱ではない、上手に出来た函は蓋と身とが程よく合せて薄紙一重のスキもない、蓋と身と合はぬ函は其間に紙かなにかを挟んで兩方を合はする必要があるが、蓋と身とよく合せてある京都出来の函には其間に一物をも挟む餘地がないから、若し少しの物が其間にあれば、却て蓋をする事が出来なくなる、吾人の精神も全く其通りで、よく佛教と相應すれば即ち純一無雜で、其間に他のいかなるものも挟まる、餘地はない、佛教と相應したる精神状態即ち信仰は固より純一無雜の筈である。故に和讃に「如實修行相應は信心一つに定めたり」とある。

當然の事

相應の應の字は感應又は響應とも熟する字で、打てば響くといふ味ひがある。

る小さき音には小さき響あり、大音には相當の大響があるのが即ち響應である、然れば響流十方の正覺大音は吾人の胸底迄も徹底せねばならぬ筈である又和讃に「子の母を思ふごとくにて、衆生佛を憶すれば、現前當來遠からず如來を拜見疑はず」とある如く、實際親を思ふ心に勝る親心で、吾等衆生を一子の如く憐念し給ふ如來の大悲心に、假令芥子ほどのわづかの心でも我等の心が響かぬ筈はない、是が感應の妙趣である。

佛の三身の中で應身といふは、吾人に對應して現出せらるる佛身である、四大海水の如き大眼を有せらるる大佛身では、吾人の小智小見に相應でないから吾人の渴仰に相應なる身を現出せられたが即ち印度の釋迦牟尼佛である諸經和讃に「久遠實成阿彌陀佛五濁の凡愚をわはれみて、釋迦牟尼佛としめしてぞ迦耶城には應現する」とあるが、即ち是れである。

正信偈に應信如來如實言とあり又應報大悲弘誓恩とある、この應の字は、トテモ出來ぬことを無理にもせよといふ様な意はサラ／＼無い、元來信せさせねばおかぬといふ親の大慈悲心より起り、ドウシテモ信せられねばならぬ如來如實の言を信せよといふ意味の處に應の字が用ひてある、是れが何として信せず居られようか、信せずには居られぬではないかといふ御親切なる御思召が籠つて居る、又如實言を一念無疑に信受した上は、この海山にも喩へ様の無い大悲弘誓の恩を報謝せずに居られようか「寒空に鉦叩けとはいはぬなり」出來ぬことをせよとの仰ではないものを、假令せよとの御命令はなくても、是が報せず居られようか、是が謝せずに居られようかといふ意味の處に應の字が用ひられてある、されば信仰も報謝も、別に六ヶ敷事ではない皆盡く我等に相應の事なれば、何れもせずには居られぬ當然の事と味はる

處の相應

、是が淨土教の極旨である、故に和讃に「像法のときの智人も、自力の諸教をさしおきて、時機相應の法なれば念佛門にぞ入り給ふ」というてある、凡て教の相應不相應は、處と時と對する人(機)の三項に分ちて詳細に考究して見ねばならぬ、先づ處に就て考察するに
 今世界に存在する國の數、宗教の數は随分多いが、其中で大乘佛教の最も盛に行はれて居る國は、いふまでもなく我日本帝國である。此點に於ては世界廣しといへども、他に我と肩を比べる國は無い、實に我日本國は大乘佛教相應の國たる事は、論より證據事實の上に十分之を證明して居る、是は近頃の事では無く、其由つて來る所頗る古い、今より千餘年前聖德皇太子は、大乘佛教を以て我國に適當なる教と爲し給ひて、之を採用せられて以來、旭日昇天の勢を以て全國に流布せられ、以て今日に至つて居る、建久二年親鸞

聖人十九歳にして求道の爲め河内磯長なる聖徳太子御廟に御参籠の第二夜、四顧沈々たる夜半、聖徳太子の靈告に、我三尊化塵沙界、日域大乘相應地云々とあり、其大乘佛教の中に於て、我國の如く淨土教の盛に流布せる國は、世界諸國中全く之なき事實に徴するに、大乘佛教中特に淨土教相應の國たる事は疑を容れない。

時の相應

次に時期にも亦相應不相應がある、雪の降る冬の寒さに帷衣は不相應であり、三伏の夏に綿入は用を爲さない。教も亦時期に相應しなければ其効益が少い、大集月藏經には、我末法時中。億々衆生起行修道。未有一人得者。唯有淨土一門可通入一路というてある、佛滅後第一の五百年の間は教行證共にあり、之を學慧堅固の時代といふ、第二の五百年は學定堅固の時代、第三の五百年は多聞誦誦堅固の時代、第四の五百年は造寺堅固の時代、この時

代に至れば、もはや自力成道の行證に於て、眞に成功するものは殆ど稀である、第五の五百年は闢諍堅固の時代で諍訟が多く、善き教法は大部分隱滞して流布しないというてある、是は釋迦の豫言であるが、この豫言は事實によく適中して居る。されば法滅百歳の後までも、特に獨り淨土教を留存せん事を説き置かれたる眞意は、この教が目下の時代によく相應せる教なるが爲めなることは、今更いふまでもない。

對機の相應

淨土教が所と時とによく相應せる事は、既に述べた通りであるが、第三に此教を信受すべき相手たる、吾人の本質要求と教とがよく相應するや否やは最後の大問題である、如何ほど場所も時期もよく相應して居ても、其教の相手たる吾人の要求本質に相應しない教ならば書ける餅と一般で、何の役にも立たぬ、ソコデ先づ吾人の中心に於ける最大痛切なる要求を披瀝して、淨土

生存欲

教がこの吾人の要求を満足するに足るものなりや否やを檢味する事が肝要である。

さて吾人の要求欲望は人の面の異なるが如く實に千態萬狀で、決して一概にいふ事は出来ないが、其中で人類一般に共通なる根本的欲望要求が大約三つある、其第一は生存欲、第二は知識欲、第三は名聞欲である、其中最も根本的で痛切なる要求は生存欲である。是は人類に限らず、凡ての生物に普遍的で、如何なる下等の生物でも、生存の欲望を持たぬものはない、あらゆる活動もつまりは自己若くは自己關係者の生存の爲めならざるは無い、如何に苦んでも、いかほごもがいても一分一秒なりとも長く生存したいといふのが、吾人を始め一般生物の根本的大欲望である、生れて間もなき嬰兒が、本能的に母の乳房を吸ひ、或は之を求めて泣くのは、即ち生存の欲望に因るもので

ある、彼の石川五右衛門の如き兇賊も、傳説によれば、其釜で煮られるに際し、始めの中は可愛の兒を兩手で高く捧げて居たが、釜中の油が熱して來て自己の生存が危く爲つた時には、遂に愛兒を自己の下敷にして尙はかない暫時の生存を貪らうとしたのは、如何に生存欲の強大なるかを證明して餘りある例話ではないか、是れ程強大なる生存欲が如何にして満足せらるゝであらうか。昔秦の始皇帝は徐福をして遠く不死の靈藥を求めさせられたが、何の効果もなく、平相國清盛は太陽を煽ぎもどして、榮華の夢の一刻も長からん事を熱望したと傳へられて居るが、矢張死を免るゝ事は出来なかつた。古來幾多の權力者、學者、智者が努力智能のありだけを盡しても決して免るゝ能はざるは死である、生存の欲望は決して十分に満足せらるゝ事はない、けれども吾人はドウシテモ此欲望を捨てる事が出来ぬ、是人世の最大悲哀である

知識欲

この問題解決の爲めには、是非宗教の門に走せねばならぬ。

吾人はわからぬ事はわからせ度い、不明の事は明にしたいといふ知識欲がある、この欲は子供の時に其萌芽を發し、成長するにつれて、其欲望も亦深大と爲る、子供が長ずるに従つて、見聞する種々雑多の事がらに就て不審を立て、長者に質問する、而して懐抱する疑問が綺麗に解釋せられねば満足しない、是が即ち知識欲の發露である、處が子供の無邪氣にして、無遠慮なる質問が、往々父兄を困らす事がある、是は父兄の知識が徹底的でない爲めである、否現今の理科學的知識が或は假定的であつたり、或は事實の表面だけを説明するに過ぎなかつたりして、根本的徹底的で無い爲めである、けれども其この欲望は實に人類社會に重大なるものであつて、現今の理科學哲學等凡ての學術の發達は全くこの欲望の產物で、文明のあらゆる利器は亦實にこの

人類の知識欲の産む所ならざるはない、然るに人類は少くも數千年の歴史を有し、其有する知識も實に非常の發達を爲して居るにも拘らず、知識が進めば進むほど、分らぬ事も亦多く爲つて、知識欲も同時に非常の勢で増進するから、決して是が十分に満足せらるゝといふ事はない、否知識が進むほど不明不安の事が多く爲つて來る、例へば普通の人は太陽熱の消長といふ様な事は、一向心配はして居らぬが、學者は五百萬年若くは一千萬年の後太陽の熱は如何に變化するであらうかと心配して居る。又太陰は我地球よりは約十萬里の距離に在りて、他の天體に比べては、非常に近いけれ共、其背後の半面は全然觀測する事が出來ぬので、天文學者は非常に残念に思つて、焦慮して居るが是非もない、斯くの如く一般の人が不明とも不安とも自覺せぬ事が其道の學者智者には中々不明であり不安である事が少くない。されば吾人の

名聞欲

知識欲は學者になつても智者になつても決して満足は出来ないのみならず、只不安と不明を増進するばかりである、さりとしてこの本有の欲望を、全然捨てる事もドウシテモ出来ない、是れ人生の一大煩悶である、宗教の信念には、能くこの欲望を満足し得るものがあるであらうか。

次に吾人は又自己の勞苦又は胸中を人に知らせ度いといふ欲望がある、たとへば一家の内になつても、主人は外に於ける萬般の勞苦と家族に對する切々の胸中を、家族の者が能く察知して居て貰ひ度いと望み、主婦は家庭に於て朝から晩まで營々たる勞苦と、親族や子供に對する各種の氣骨折りを、主人がよく諒察して、少しでも其重荷の軽減する様に舵を取つて貰ひ度いといふ望みがある、併し是が何時でも欲望通りに爲らぬ場合が多い、是が不平の原因で、家庭不和の始めである、而して如何に奮勵盡瘁するも、遂にこの欲望

如實修行相應—信心

の奇麗に満足せらるゝ事は到底六ヶ敷い。吾人は實際ドウしても家庭に對し社會に對し、畢竟己れの知られざるを患へざるを得ない、是れ人生の一大不幸である、この欲望を満足せしめ得る宗教が果してあるであらうか。

以上の三大要求に、正しく相應するのは、實に南無阿彌陀佛の宗教、即ち淨土教である。

阿彌陀佛は名を以て物を攝すといひ、光明名號攝化十方といふ、其阿彌陀の名の意義は如何といふに、是は阿彌陀由須といふ梵語と阿彌陀婆といふ梵語との二の合成語であつて、阿彌陀由須は無量の壽命を意味し、阿彌陀婆は無限の光明を意味する、其光明は即ち智慧の相である、阿彌陀佛は即ち光明無量、壽命無量の大覺者である、其因位に於て四十八の誓願中、第十二に光明無量を誓ひ、第十三に壽命無量を誓ひ、第十七には諸佛の稱揚讚嘆を誓ひ

この誓願を成就せん爲めには、因位の時不可思議兆載永劫に於て、無量の徳行を積植し、欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に愛着せず、忍力成就し、衆苦を計らず、少欲にして足ることを知り、染患癡の心なく、三昧常寂にして、智慧無碍で以て前記の三誓願のみならず四十八の大誓願を成就し給ふたのである、實に願徒爾ならず、力慮設ならず一々吾人の痛切なる衷心の要求に適應せざるは無い、我等は只一念無疑に、この南無阿彌陀佛の名義を深く聞信し、一心にこの不可思議の誓願に乘托することによつて、正定聚不退轉に住し、必ず無量壽無量光の佛果を證得するの一大幸福を得るのである。極惡最下の機に對しては、極善最上の妙法に非ざれば之を救済することを得ず、小慈小悲もなき吾人を救ふに、佛は大慈大悲を以てし給ふ、無明の闇を照破するには大智慧光明を以てし給ふ、矛盾の

我等を救ふには不可思議の誓願力を以てし給ふ、是れ如來は元來吾人の本質要求を知悉し、我等を救済するに最も相應せる方法を案出せんが爲めに、五劫に思案し給ふたのであれば、其結果出來上つた誓願が吾人に最もよく相應せざる筈はない、吾人の要求が是れによつて満足されな、筈はない、「無碍光如來の名號と、彼の光明智相とは、無明長夜の闇を破し、衆生の志願をみてたまふ」のである、かくまで佛に知り悉され、加之、佛の御名によつて、名聲十方に超え、諸佛の稱揚讃嘆を受くるに至つては、胸中の名聞欲も満足されない道理はない、根本の無明疑闇は明信佛智の信心の智慧によつて、破滅せられ、はかなき無常に對する生存の欲望は、佛陀の救済に依り、無量壽の證果を憧憬歡喜することによつて満足せられ、吾人の欲望は茲に悉く満足せらるゝ譯である、是が即ち如實修行相應である、如實修行相應は信心一

不如實修行
不相應

つに定められたるはこの故である。
かゝる結構な教はあつても眞の信仰に入らざる者は不如實修行のもの不相應の者であつて、志願、満足が得られない、和讃に、「本願相應せざるゆへ、雜縁きたりみだるなり、信心亂失するをこそ正念うすとはのべたまへ」とあるは此處の事である。

往生論註に曰、然有下稱名憶念而無明由在不滿三所願者何者由下不三如實修行一與二名義不中相應上也。云何爲下不三如實修行一、與二名義不中相應上。又有三種不相應。一者信心不淳、若存若亡故。二者信心不一、無決定一故。三者信心不三相續、餘念間故。此三句展轉相成。以三信心不淳一故、無決定心。無決定心一故、念不三相續。亦念不三相續一故、不得決定信。不得決定信一故、心不淳。與此相違、名三如實修行相應。是故論主、建言「我一心」。

吾人は吾人の要求に最もよく相應せる彌陀の弘願眞宗に遇ふ上は、必ず淳心一心、相續心の眞信仰に入り、本願相應の行者と爲り、以て吾人の要求を満足せざるべからず。

利他の信樂うることは
願に相應するゆへに
教と佛語にしたがへば
外の雜縁さらになし

本願相應の
行者一行誠
上人

行誠上人は臨終に其門弟が錯つて病間の床に來迎の圖の代りに、閻魔の像を掛けたるを觀て、少しも咎めず、平然筆を執り、行誠、右者本願相應の行者にして今命終に臨めるを以て、御來迎の御用意可然と奉存候、閻魔王府、西方淨土二十五菩薩御中と書し了り、莞爾として從容、往生の素懷を遂げられたといふことである、是れ本願相應の行者の模範であつて、誠に欣慕すべき美談である。

平凡

凡の凡

私は平凡といふ題を掲げまして暫くの間お話しをする様に考へて居りますが、其の平凡たるや何等珍らしい事のない平々凡々でありまして、凡の凡たる私が平々凡々の御話しをするのでありますから其の御つもりで御聴きを願ひたい。

平凡の充實味

先般、私が北海道へ参りました時、關東の平野を通りました。其の景色たるや實に平凡で、何等珍らしいものがない、眼の及ぶ限り皆田畑でありました。しかし、かゝる平凡極まる景色を眺めた私は何とも言い知れない感に打たれて微笑が自ら浮ばない譯には参りませんでした。其れは外でもあ

柏谷樾藏さん

りません、今や見渡す限りの曠野には黄金色をした米が實り、一風來る毎に穰々たる稻の波を見たからであります。日本は商工業も盛になつて來ました將來も商工業によつて日本の富を造つて行かねばならぬと一部の人がいうて居りますが、しかし、日本は何と申しましても矢張り農本位で、一年に五六千萬石の米が毎年とれる。其の高を金で見積つて見ましても十數億圓といふ額に上つて居ります。私は爰に於て、平凡の景色のうちに充實味を見出したのであります。成程本當に、奇抜なる景色と言へば耶馬溪あたりでありませうが、私は、かゝる天下に比類のない景色を見る爲めにわざ／＼足を運ばなくても、反つて平凡たる景色を見て充實を見出すのであります。平凡といふについてそろ／＼申したいのであります。今一例を申しますると、私が九州に居りました折に、福岡縣に柏谷樾藏さんといふ人がありま

平

凡

した。實に何等位階勳等を持たぬ平凡な人でありました。元は博奕をやつて手もつけられない悪黨でありましたさうで、其の人が或る動機で、驟然と悪事をやめ、眞人間になり、且つ大の佛法者となり、今では縣下到處に法味を語り、萬人の崇敬の的となつて居るのであります。其の人が或る日私の處へブラリとやつて來た。さうして芳名録のやうなものを持つて來て、是非私の爲めに何か一筆かいて呉れないかといふ事でありました。

私は丁度何かの事で大いに立腹をして、家内を叱つて居りましたので、餘りのはづかしさに穴へでも這入りたい様に思ふたのであります。さういふ時でありますから、心も亂れて到底筆をとつて文字をかく事が出来ませんと思ひましたから「私のやうなつまらぬ者が書いては反つて御迷惑だらうからお断りする」といふたが、中々訊いてくれない、で何か書いた様に覺えて

色の平凡

居ります。其の時の話しに「私は娑婆は、何事でも忍んで行かねばならぬ處どきいて居りましたが、私は此れまで多くの方々に忍ばせて來ました。忍んで居て下さつた。忍んで居て下さつたればこそ私のやうな悪黨が今まで生きのびて居られるのであります」と涙ぐんで語つて下さつた。

私始め襖の外にわた家内も此の話しを聞かされて、非常に感じまして、又言ひし尊さがその間に見出された事でありました。今や、秋漸くたけなはで、收めに急がしい時となりました。皆さんも各自に充實をせねばならぬ事でありました。それについて何でも平凡が一番いゝといふお話しを致しませう。先づ第一に、「色」であります。私等の眼には何の色が最もいゝかと思せば、赤でもない、紫でもない、青でもない、緑、此の色が最もよろしいのであります。科學上から申せば、色はエーテルの波動である赤い色の波は

天然の平凡

餘りに長過ぎる、紫は短う過ぎる、然るに「緑」の波は長短何れにも偏らない、で、最も中庸を得て平凡なのであります。

氣候——でも餘りあつい所も人間が住めないが、地球上極寒たる西比利亞の東北部でもいけない、矢張り暑うなし寒うなしの温帯地、即ち平凡な處が人間の最も住み心地のいい處であります。日本がそれで、矢張、平凡がよろしい。宇宙にかゝつて居る星をながめて見ても然りで、海王星、天王星は、餘りに太陽から遠いというて水星、金星は餘りに近う過ぎる、それでは丁度いゝ加減な處にあるのはどの星かと言へば火星か、地球であります。でありますから、人間が住む事が出来るのでありませう。

かく平凡といふ事が我々には適當してゐる事ではありますが、今、人間の生活に於ても平凡なのが一番長く生きられ、随つて活動期も長くなる譯であり

四十五度の角度で働け

ます。というて、グウタラで日を送つてゐてもいけない、丁度いゝ加減に、急激でもなく、グウタラでもない生活をせねばなりません、それならばどうしたら吾々の生命を長くする事が出来るか、今此れを大砲の上で申しますると、一番弾丸を遠い處に届かすのには、餘り砲を上向けてもいけない、又、餘り砲を下向けにしてもいけない、丁度いゝ加減即ち數學の上からいふと直角九十度の半分四十五度の角度に砲身を置けばよろしいのであります。でありますから人間も四十五度の角度で中庸に働いてさへ居れば生涯は長くなる随つて活動力の充實した間が長いのであります。

更に宗教の方から考へて見ると、三論も中道を説き、唯識も、天台も眞言もみな中をといて極端ではいけないといふ。かく權大乘、實大乘は申すまでもないのであります。眞宗は然らば如何ぢや、いふまでもなく又平凡を主と

更にめづらしき法をも弘めず

されてあります。

祖師聖人自ら仰せられて「親鸞更にめづらしいき法をも弘めず、只如來の教法を我も信じ人にも教へ聞かしむるばかりなり」と、實に平凡の凡たりであるその平凡たるや常なみの平凡ではない鍛えに鍛え、練りに練つた上に出來上がつた平凡であります。吾等は此の心を心として大いに自らを修養し、而して法のため國のために盡す所がなくてはなりません。

犠 牲

昨年の六月十五日、淨心會發會式に参りまして御話申しましたが、今日は又月こそ異へ同じく月の半なるは何等かの意義が存して居ますかの如く

耳を蔽ひ目を閉ざす

に感せられます。殊に、今夜こゝに集まれたかたは、宗教といふものに熱心な方ばかりであると今川先生から承はりまして、いひ知れぬ心強さを感ずるのであります。一體私等は落語とか、義太夫とかであつて見ますれば、我れも我れもと進んで押しよせるのであります。少くも教訓的少くも宗教的の事になりますと耳を蔽ひ目を閉ざすのであります。

私は嘗て、中央幼年學校に厄介になつて居りましたが、丁度この明治専門學校の如く全校生徒は一堂に起居したのであります。師弟の間はあだかも親子の親しみでありました。私は八ヶ年程厄介になつたのであります。すが、校長先生始め先生方が皆立派にお揃ひになつて居られ、完全な設備が存して居ると云ふ點に於ては、私の申します中央幼年學校も尙及ばぬかも知れませぬが、其實相共鳴せる所は、私の斷言致す所であります。

思ひ出の種

私はこの明治専門學校に参ります度に何んとも云へぬ感が私の胸に迫るのであります。私の第二の故郷を偲ばすには居れぬのであります。學校はどこ迄も大なる一家族であります。古い／＼巢立ちの若鳥の様に何處ともなく飛び去る様であります。離れても離れても忘れることの出来ぬのは親子も及ばぬ、兄弟も及ばざる喜びを私等は相重ねて居るのであります。私は屢卒業された方々と汽車なり電車なりで廻り合つたときにいつもこの感を深うするのであります。此明治専門學校の諸君も定めしお互に一生涯忘ることの出来ぬものとなられるのでありませうと思ひます。私は今から私の考を腹藏なく諸君の前に披瀝致します。或は過激に及ぶかも知れませぬ。甚だ失禮なことを申すかも知れませぬ。私は唯々私の心を諸君の前に投げ出して諸君の心と共鳴する迄お話をしたいと存じます。

旅行と人生

ます。

第一に申したいことは近來私は次ぎの様なことを考へて居るといふことであります。

私の一生涯は丁度旅の宿に居るやうなものである。私と云ふものは(過去より現在、現在より未來へ)一つの旅であります。五十年の一生涯は途中の一つの宿であると考へて居ります。假りに左様であるとすれば立つ鳥も後を濁さずと申します、宿賃をも拂はずにこの宿を立つてはなりません。又は宿賃を借りて立つべきでないと思ひます、無錢遊興をやつてはならぬ。人間といふものは自惚の強いものであります。自分では如何にも大きな事業を爲した積りでも、五十年の宿代は確かに支拂ひした積りでも、なか／＼左様は参りませぬ。こゝが私の頭を悩ます所であるのです。何んの點よりして

も、私共は此上なき現在の優遇を受けて居ると申さなければなりません。私は單に相當な宿代を支拂ふばかりでない更に身分相應な茶代をも残したのであります。古來、所謂、大なる成功は出來ず憾を吞んで斃れた大人物の人はありました、されど夫等の人は、大なる茶代を残して後世の者に與へられた大なる事業が存して居るのであります。楠正成公の如き其一人であります。公に對する宿屋の待遇は酷を極めました。けれども正成其人は尙且茶代を置いて立たれ、此世の別れ言葉にも七度生れて國の爲めに盡す陛下のためには命を捧げ奉ると申されたのであります。菅原道真公にせよ宿屋は大なる虐待をなしました。名は太宰の權帥警護の名を以て實に酷なる監視の者を附しました。然るに道真公が國を愛せられたる心は始終一貫、大なる茶代を拂つて永への地に旅立たれたのであります。諸君、こゝが實に

明治記念博覽會

我々國民、後世人が千有餘年の今日迄も神とも佛とも崇むる所であります。以上の如くに世の中を宿、光陰を其時の道なりと思ひますれば、如何に非常な虐待を受けても大なる茶代を残して行かれる人は大なる偉人と申さねばなりません。これが私等の範とし自らを省るべきことであるのです。私共が今日申さんとする犠牲とは此事に外ならぬのであります。諸君の内には已に御承知の方もありませんが、昨今福岡に明治記念博覽會が開かれて居ります。私は其内部を廻る内にも重く、且つ深き感慨に沈んだのであります。明治の時代を偲ぶ数々の紀念品の内にも、別けて私の心を打ち沈めましたのは、明治天皇御遺物であります。私が中央幼年學校に在職中の事でありませんが、五月三十日又は五月三十一日……その日には毎年長くも陛下の御臨幸を仰ぎ、光榮ある其卒業式には天顔を拜することを得

観艦式

たのであります、其時深く私は感激いたしましたことは、卒業生中三名の優等生が御前講演を申上げる可なり長い時間といふものは、長くも陛下には絶えずにこゝとえみを含ませられ、生徒の申上げる言葉を一言一句も逃さず御聞きになりました。それより式場に臨御となりますれば、總代の大尉が十餘間隔たる生徒隊の前に立つて最敬禮をなし、卒業證書を拜受し、三人の優等生は侍従武官長より恩賜の品を拜受致します。このとき陛下には二等卒に等しき是等卒業生に對して一々舉手の御答禮があるのであります。私等當時職に在りしもの一人として感涙に咽ばぬものはなかつたのであります。

又嘗て東京灣に於て大観艦式が行はれました時、横濱に行きたる校長を除いては我々職員生徒一同は、某地に於て陛下の御乗艦の通過を拜しまして

予の追憶

丁度學校への歸途につきました時、急に侍従から教頭に電話がかゝりまして陛下より、生徒は今何處に居るか、彼等に茶菓を與へよとの御諭でありました。教頭始め感激の涙に咽んだのであります。教頭より、生徒一同既に歸途につき申したる旨を御答へ申しましたが、翌日は早朝八臺の車に滿載せられたる御菓子、果物等が學校に到着致しました、生徒は申すに及ばず全校舉つてこの大なる恩賜品を傳へ受けたのであります。

明治四十年に東京を去りまして、この福岡へ参りましても再び、龍顔を拜することが出来るものと信じて居りましたのであります。然るに残念なことには、久留米に於ける大演習行幸の際は、私は父の喪に會し其機を失ひました、今御遺物を通じて御追憶申上ぐる時に當り、計らずも、昭憲皇太后の御崩御に接しました、又何とて申し上げべき言葉がありませんか。

明治陛下と
昭憲皇太后

陛下は我國の最も大切なる時に御生れになりました、何等御遊興の御事もなく御生涯を終られました。其御一生は實に犠牲の結晶であります。御一身を犠牲にして國民を愛せられました。昭憲皇太后にあらせられても、御生涯只國の爲め民の爲めと御心を碎かせられ遂に神去りました。實に尊き犠牲となられたのであります。

乃木將軍の
遺品

第一會場を出で、第二會場に入ります。先立ち、私は乃木將軍の遺品を見て再び感慨に沈みました。其中に大尉時代の敷物がありました。誠に粗末なもので、百姓も用ひざる程であります。行李、靴、夫等のすべては大將の昔を偲ぶに充分であります。勿論左様な品物は形骸たるに過ぎませぬ。過ぎませぬけれども一度將軍の過去と其御心事とを聯想すれば油然として感胸に迫るものがあります。將軍は大なる犠牲として吾々國民に對せられたのであ

乃木家の家
庭

ります。嘗て、將軍の御息たる乃木保典氏が、中央幼年學校に在校して居られましたが、寡言にして而も優秀な方でありました。一度保典君旅順の露となれりとの報を耳にするや、我々職に在りしもの大歎息をもらしたのであります。又幼年學校に於きましては日曜日の夕食に限つて、自宅に於てなすを許されて居りましたが、宅に歸られた筈の保典君、常に學校で夕食の膳に就かれたのであります。私は變だと思ひ存じまして區隊長に訪ねますと、いや、乃木は家に歸つて夕食をせうとしたところで、將軍の御夕飯は學校のよりも粗末だからですとの事であります。

成程、斯様なことは些細なことではあります。されど、諸君、この一事に於ても明かに將軍の平常御生活の一端を伺ふことが出来るのであります。乃

木家は實に一家を捧げて大なる犠牲とされました、犠牲の權化は實に乃木將軍一家を指すのであります。

第二會場に入りますれば、維新志士の記念たる一種のパノラマがありました、其湧然として起る追懷の念は私の胸に大なる感激を附け加へたのであります。其中の一部に、志士の動靜を探りて大いに不利をなさしめたる、目明かし文吉なるものが木にくくりつけてある所がありますが、この不忠漢には首が跳てないのであります。何故であらうかと説明を聞きますれば、如斯き不忠漢は當時志士の刀で切られる光譽を得なかつたのだといふ事であり、更にも同様に、一人の女が木にしばりつけてありましたが、これもやはりかゝる光譽を擔ふことが出来なかつたのであります。其外、尊氏の木像、直義の木像、義詮の木像の而も首が天誅を加へられて居ります。御維新當時

犠牲の典型

に於ける志士等の犠牲的精神に於ては立派なものであります。

その立派な精神は、實に典型を乃木將軍に見るのであります。然り、五十年前の當時には幾多の乃木希典、乃木將軍があつたのであります。然り幾多の乃木保典君があつたのであります。假りに乃木大將が維新當時に居られたものとすれば如何でせう、果して大正第一年の如くでありましたでせうか。否、私は信じます、當時では誠に平凡なものであつたと。然るに維新志士が左程迄に世人に考へられなかつたのに、今日我々が冷靜に比較して何等差異なき人の行爲が、何故に斯くまでも大なる感動を世人に與へたのでありませう。これは取りも直さず、維新當時の人心と、現今の國民思想との間に大なる變化の生じたる爲めであります。諸君、五十年前の志士は皆、乃木將軍でありました。乃木大將であつたのであります。

赤穂義士

今日の人々は乃木大將を打ち眺めて、到底我々の及ばざる神であると思ふは、何たることでありませう。

かゝることは決して人事でありませぬ、現に私自らの心の内に維新の志士の心事を左程迄に考へませぬ。そして熱狂的に乃木將軍の心事の高潔にのみ心引かるるのであります。我れと我身を顧るときに、私は慚愧の念に耐へぬのであります。元祿十五年の赤穂義士の快舉は、當時の人心に大なる感動を與へました。成程、かゝる義士の行を天下舉つて賞歎するは一方よりすれば大に賀すべきであります。活眼を開いて他面よりすれば、彼等が否現在に於ける私共が、義士を以て、乃木將軍を以て、人とし生れたる神である、天下何人と雖も以て企及すべからずとなし、唯單に驚き唯單に崇重するのみなるを思ひますときに、我々たるもの實に慚愧たるものが存するので

歌の行ひ

あります。

私自身に於ても犠牲的精神が缺けつゝあるのであります。憎むべき利己的、打算的となりつゝあることを告白するのであります。我々人間は其精神が興奮、又は緊張せる瞬間は、神の如く崇高なものであります。神の如く強いのであります、されど一度其度を失へば、一方では唾棄すべき獸の行爲をなすのであります、實に戦慄せざるを得ませぬ。國亂れて忠臣出で、家貧窮に及びて孝子を生ずるは自然の數であります。我々は國亂れずして忠臣を出し、家貧しからずして孝子を生せしむる事に勉むべきであらうと存じます。

私はこゝに二つの言葉を諸君の前に提供いたします。一つは賢也といふことゝ一つは愚也といふことであります。この數十年の間に實に人類は賢となりました。近來の流行はこの賢と申すことでもあります。私自分に於きまし

二つの言葉

法然上人

ても其買かぶりをやつて居るのであります。面白い落語とか狂言の如きには我れから進んで聞きに向ひます。されど忠告的とか、教訓的になりますると兎角足が重くなるのであります。然れども諸君、静かに考ふるときは賢は不朽にあらずして、愚こそ、愚なるこそ真に吾人に永遠不變不動の偉力を與ふるのであります。私は今後、この愚をたどりたごつて、世を送りたいものだとして居るのであります。勿論私の申します愚は賢を経たる愚を指すのであります。

智慧の法然、日本に於ては其比なしとまで呼ばれ、遂には師たりし人々をさへ、超えたりと稱せられたる法然上人は、四十三歳にして徹底の信仰に入り吾は愚痴の法然なるぞと告白されたのであります。爺や婆を伴侶として、清き鴨川の邊り、さゝやかなる庵の主となりて、一向専念誠に寂たる後半生

親鸞聖人

を送られたのであります。其偉大なる御徳は年を加へ来る毎に偉大を増すのみであります。愚痴の法然は智慧の法然よりも大にして永久でありました。法然聖人の弟子たりし親鸞聖人に於かせられても、同じく緯空とて英才を以て聞えたる方でありましたが、年と共に其圓熟さるゝに及び、自ら愚禿と稱せられ僧にあらす俗にあらすと申されたのであります。愚禿が心は内は愚にして外は賢なりと申されましたけれど、その實外より見れば愚なるが如く而も大賢であります。併しながら聖人の如く自ら深刻に自分の愚なるを覺るに及びて、そこに大なる光が存するものであります。

彼の顔回も自ら愚人だと申して居ます。而も孔子は幾千の弟子の内から顔回をして最も賢なりと申されたのであります。この處に私共の徒にすべからざる深義を存して居るのではありますまいか。愚なる處に偉なる點存

顔回

愚を學べ

し、愚てふ所に崇高を見られたのが孔夫子の眼識であつたと考へます。我々はこの愚なる點を學ばなければなりません、この愚を修養することが出来れば、これが一番の偉大であり崇高であると思ふのであります。

私は私の輕薄なるを思ふときに、深大なる親鸞聖人の愚を學びたいのであります、法然聖人の愚なる點を學びたいと思ふのであります。諸君、愚を私の心に結び付けて、初めてこゝに大なる犠牲的行爲をなし得るのであります。單に知識からしたならば犠牲程愚なものはないかも知れませぬ、されども犠牲を爲すには、この愚を學ぶを他に置いては何物も存せざるを斷言いたすのであります。

椽の下の力持の強さ

犠牲と爲る、椽の下の力持と爲るは打算的には割の悪いことでありませう彼の正成にせよ、道真にせよ、單に功利よりすれば如何にも愚でありませう

吾々の犠牲となれるもの

乃木大將も長生きした方が利であります、然れども將軍は愚なる方をとられました。楠正成も湊川で死なれなかつたならば、利であつたでせう、然れども公は愚なる方をとられたのであります。廣瀬中佐も一度ならず二度三度も、部下のために身を投出されなかつたならば利であつたかも知れませぬ然れども中佐は愚なる方をとられたのであります。大石良雄とても、主君の仇を討ち自害するが如き、身にとつては不利なことでありました、然れども良雄は愚なる方を喜んで選んだのであります。

眞箇に、後世人をして其崇高なる人格に追慕措く能はざらしむるは、犠牲であります、犠牲的精神、犠牲的行爲であります。即ち自ら欣然として愚に身を投することでありませぬ。私等如き凡人に在りては、智をとりて愚を捨てる場合が多いのであります。故に極力愚といふ大なる事柄を我が物とする

に努力せなければなりません。愚の在る處に犠牲的精神活躍し、愚の存する處に犠牲的行爲が行はるゝのであります。所謂近代の新しい思潮よりすれば愚の極であると解し易いのであります。されども、私等の生るゝや親の苦痛を犠牲に致すのであります。其後とても、両親の苦勞、両親の力を犠牲にして、幸福安穩に生活を成すことが出来る、日々の食物にしたところで幾多の生物を犠牲に致します。更に一步を進めて今日の活動力の凡てが生物の犠牲、其根源を有するのである。

茶代を拂へ

如斯く、私等の生命と生活とが、即ち私等の全部が、私の全生命が他の犠牲により成立して居る以上は、甘んじて、欣々として自らをも犠牲に拂ふべきであります。否、拂はざるを得ぬのであります。私等の現在には、即ち私の今日は大なる優待に包まれて居ます。道真卿にせよ、正成公にせ

よ、あれ丈の虐待を受けられたるにもかゝらず、あれだけの大きな事を殘されました。我々は身分不相應な待遇を受けて居るのであります。どうして未拂でこの宿を立つことがなりませうか。どうしてこの五十年の宿屋に金を拂はずに行かれませうか。假令、一つの小さな茶屋にしても、茶代なしで立つべきものでありますまい。諸君よ、社會といふ我々の作つた法律上の制裁は、或はこの五十年といふ大止宿所未拂者に對して力が及ばぬから知れないけれど、自然と云ふ大なる權威者は寸毫の呵責なく、是等犯罪者に大鐵槌を加ふるのであります。今や私は四十の坂に參りましては頭上には寂しい霜の斑點を戴いて居ります。今や、今後、門松を見る數も二十回位のものとなりました。どうしてこの支拂ひをなすことが出来ませうか。已に私には澤山の未拂があります。常に私は之を思うて悚然たるものがあります。私

佛陀は犠牲の塊

共は優遇に對する萬分の一の犠牲たりとも支拂ひせなければなりません。宗教よりすれば佛陀は犠牲の塊であります。この佛陀の犠牲心を以て明治天皇は民草を憐れみ給ふたのであります。佛陀の犠牲てふ、人格者の極の極を以て、民草を畏くも、子等よとの給ひしは、昭憲皇太后にて在はしましたのであります。私等が佛を信するのは佛陀が犠牲をいとはず、私共の犠牲となつて導き給ふが故であります。向ふが無限の犠牲を以て我れに與へらるゝが故に、小なりと雖も其萬ヶ一にも報の奉らんとするのであります。

佛に接する方法

佛徒は感恩の生活、謝恩の生活をなすものであります。自分が己に身分不相應なる優遇を受けて居る以上、自分の身を捧げて犠牲とすべきものではありますまいか。日本に生れて多大の犠牲を受けながらも、未だ、自ら我等の

消ゆる期なき大人格

報すべき犠牲をなさざるを耻ぢるのであります。我れに不平生するとき、我れに不満の生ずるときは、佛陀在ますを想へ。佛陀は更に更に高く大なる、幾十倍の犠牲を甘受せられるのである。苦しみあるとき、悶えあるとき、一度心を佛陀に馳せなば、安らかに、且、喜びに満ち／＼たる心と胸を佛の御手づから受けることが出来る、佛陀に向ふときは何等の不足なく、愉快に其靈氣に接することが出来ます。

孔子は愚者と呼ばれたる顔回を以て、大賢、亞聖と申されました、法然聖人も親鸞聖人も共に、自ら愚鈍なりと申されました、偉人は凡て愚徳を發揮せられたものであります。一見すれば所謂愚である、されども一度其心中を窺はんか、清くして高き、高くして強き、心の響に打振ふのである、永劫に消ゆるなき大人格に接します。明治の五十年の今日に於て乃木大將は嘖々

わが心の影

となつて来たのである。

私は私の心事を内観する時に、維新志士に對して誠に相すまぬ言語道斷のものゝ實感します、其刀の錆ともなることの出来ぬ様な不仕末なものであります。人事でありませぬ、これらは皆私自身の心の影であります。世に露探を叫ぶ聲が大に起つたならばそれは自らの心の影であります。何處かに其腐敗せる分子が身中に存します。他人の事でない、自分の心に引き合はせ考ふべきであります。

借金を残す

淨心會の諸君はどうかこの大家族の内に於て、充分身心を修練して下さい。社會の思潮が如何様であらうと願ふを要しませぬ。潮流の上に超然として自己の改革を行はれんことを望みます。云ふに云はれぬ甚深微妙の愚の大意を、明かに體驗するにより始めて私と共にこの佛陀の大犠牲に感謝し

奉ることが出来るのであります。どうか出来るだけ犠牲に身を捧げて、吾人の一生に決して借りの残らぬ様に國家のため社會のために盡したいものであります。無錢遊興をなすべからざるは云はずもがな、多大の茶代を拂つて去りたいのであります。

選擇

好む所は二つか二つ

選擇といふ事は、澤山の品物の中から、一つなり二つなりの善良なるもの優れたものを抜き取る事である。日本酒と、麥酒と、葡萄酒と、ウイスキーと、ブランドーなど、酒に澤山の種類があつても、いざ飲まうといふ事になるとその人の嗜好によつて、その中の何れかを選ばれる譯である。勿論これ

佛教讀みぞ
普通讀み

物質の選擇
は容易

にも例外があつて、日本酒ござれ、麥酒ござれ、ウイスキーござれと、酒の匂ひのするものには目のない人もないではないが、先づ普通では、日本酒黨、麥酒黨、ウイスキー黨といふ様に、大抵の人はその好む所は一つか二つに限られてある。

多くの酒の種類の中から、日本酒なり、麥酒なりがその手に觸れた時、既に選擇が行はれて居るので、佛教讀みにすれば選擇といひ、普通一般では選擇と發音して居るのであるが、讀み方が變つて居るだけで、その意味は少しの變りもない。

選擇が最も手近に行はれるのは、衣食住即ち吾々の物質的生活の上にと就ていあるが、その他百般の事象の上にも廣く行はれるもので、政治の上にも學術上にも、更に進んで宗教の上にも缺くべからざる問題である。併し乍ら物

宗教の選擇

開祖の態度
如何を標準
とせよ

質上に於ける選擇は精神上のそれに比べると遙に容易に行はれ得るのである。諺に花より團子といふ如く、銀側時計よりも金側時計が喜ばれるが如く、大した苦心も費さずに選り取る事ができる。

然るに精神上に於ける選擇は、物質上に於けるそれよりも困難である。單に一口に宗教といふ事はできても、宗教の中には佛教もあり、基督教もあり神道もある。その中の何れに就くか問題であり、若し幸に佛教が選ばれたるにした所で佛教の中には、昔から八家十三宗などいふ如くその流義はまちまちである。

自分の考へる所では宗教の選擇は、その開祖の求道の態度如何を標準として行つたならば、大した誤りはないやうに思はれる。若しこの標準を誤つて一時の發作的感情で何宗にでも飛び込まうものなら、蛇蜂とらずに終らねば

選擇

源空の態度

ならぬのが常である。我々の先輩として、最も厳密に自身の宗教を間違ひなく選擇した人は源空聖人であらう。源空聖人は非常な勉強家で、自身の宗教を選擇する爲には苦心慘憺あらゆる研究をつゞけ、思慮を費し、十五歳出家の曉より四十三歳にして始めて自己の信すべき理想の宗教を探り當てたのである。即ち十五歳の春から四十三歳迄二十四年間は全力を捧げて宗教の選擇に努力したのである。

選擇本願念佛集

その結晶としての紀念品は選擇本願念佛集といふ書物であつて、これは關白兼實の請によつて著作されたものであるけれども、選擇に選擇を重ね、精撰に精撰した上で出來上つたものである。然らば選ばれた品物は何であらうか。それはいふ迄もなく本願の念佛である。本願の念佛とは何であるかとい

選擇の理由

へば南無阿彌陀佛の六字であつた。自身の宗教として南無阿彌陀佛の六字が選ばれた理由については、この書の冒頭によれば「往生の業は念佛を本と爲す」とある。即ち選擇の要點は往生の業であるからといふのであつて、他宗教のような回りくどい修行や戒行を必要とせず、唯南無阿彌陀佛の六字で、人生の大目的たる往生の業が整頓されるのであるといふ事になるのである。

選擇の證據

これは日本酒と麥酒との好き嫌ひといふやうな簡單な選擇の仕方ではない。溯れば久遠の昔に彌陀佛が我々のために選擇しておいで下された宗教であつて、源空はこれを證するために多くの先輩の著書からその證據を引き出して居る。

道綽の選擇

先づ始めに大集月藏經に我末法時中、億々衆生、起行修道、未有一人得者

唯有淨土一門可通入路とある文句が、支那の道綽禪師がその著安樂集の中に引いて居るのを再び月藏經ぐるみに出して來て居る。釋迦の滅後五百年を正法といひ、その後一千年を像法といひ、その後一萬年を末法といふが、末法とは正しく現代であるから、現代に於ては假令ひ佛道修行を志すものがあるつても、釋尊といふ求道上の中心人物の時代を去る事が遠く、隨つて教理の解釋が困難となるから、唯有淨土一門可通入路といふ、その淨土の一門とは如何なるものであるかを詮議しなければならぬ事となる。安樂集は第一の理由を去聖遙遠といひ第二の理由を理深解微といつて居る。源空はそのまゝを採用してゐる。

法華經の注
文と元曉、
善導

法華經などを開いて見ると、その教へは明かに賢者に向つて説かれたものである事が理解される。即ち「此經爲深智說、淺識聽之迷惑不解」といひ又

「無智人中莫說此經」といつてゐる。即ち法の精髓を書いたもので、天台宗日蓮宗などはこの經によつて教理を立て、居る。然し乍ら世の中にはさう大した立派な男も居らぬもので、法華經の注文通りに行つて行ける者は殆ど稀と見てよい。源空自身もその柄ではないと曉つた。それ故元曉の遊心安樂道の中にある「淨土宗之意本意凡夫、兼爲聖人」などの文章や、善導の立義分の「諸佛大悲於苦者、心偏愍念常沒衆生」といつてある所や又「是以勸歸淨土、亦如溺水之人急須救岸上之者何用濟」といふ文句には常に心が引かるゝのであつた。

五正行

源空が聖道門をすて、淨土門に歸したのは以上の理由がある。その根本は行の難易といふ事であつて、世の中が忙しくなつて來たので、とても複雑極まる修行などを行ふ事ができなくなつたのであるが、それでも次の五つの行

は是非とも實行しなければならぬ。

- 一、讀誦
- 二、觀察
- 三、禮拜
- 四、稱名
- 五、讚嘆供養

右の五つを五正行といつて居るが、これに對して五つの雜行がある。即ち正行とその形式に於て相似て居てもその内容に雲泥の差がある。

選擇集に此の五雜行を止めねばならぬ理由を書いてある、此れ即ち五番相對である。

五番相對

五番相對

- 一、親疎對
- 二、近遠對
- 三、有間無間對
- 四、廻向不廻向對
- 五、純雜對

斯く正行雜行を對比して五雜行は悪いものとしてある。第一親疎對と言ふのは淨土の本尊は彌陀なるが故に、此の經を讀むものは親しくして、然らざるものは疎い。故に疎は捨しねばならぬ。第二近遠は正行なすものは近く雜行をなすものは遠い。第二彌陀に對し、常に禮拜をするは心專らなるものにして他の者を禮拜するは、即ち心に隙があるので專念ではない。故に專念ならざるは心劣れるものである。第四は彌陀の名を唱ふるは常に彌陀を慕ふ

第十八願

のであつて純一である。然らざるものは雜行にして粗雜である、純一なるものはよく粗雜なるものは悪い。第五は彌陀の徳を稱し彌陀を供養するは眞に彌陀を頼むもの、然らずして他を讃嘆供養するは即ち彌陀を疎にするものであると説いて、法然聖人は此の正行を選び雜行を捨てよと云つた。

此れは法然聖人の意見のみならず、佛の意見である。聖人が勝手に選んだのでなく、實は佛が選んだのである。更に進んで選擇集には元此れ我等が選んだのでなく釋迦が選んだのであると書いてある。又阿彌陀佛が已に選ばれたものであると言ふ事も説いてある。これが即ち選擇本願である。本願は彌陀の願である。彌陀は南無阿彌陀佛を選び此れを稱ふるものを救はんと言はれ、斯れを選ばれたものである。人々には親孝行慈善事業等幾多の本願があるが彌陀は我名を唱ふる者を救ふのが願である。その願は凡て四十八ある。

勝劣と難易

が其の中にて此の第十八番の願が最も大切なのである。彌陀は斯く願を掛け誓を立て、成佛せられた。此の念佛を選んで衆生を救はんと願はれたのである。選擇集には何故に彌陀は此れを選んだかと問を起して次の如く書いてある。

聖意難測。不能輒解。雖然。今試以三義解之。一者勝劣義。二者難易義。初勝劣者。念佛是勝。餘行是劣。所以者何。名號萬法之所歸也。然側彌陀一佛所有四。智三身十力四無畏等。一切内證功德。相好光明說法利生等一切。外用功德。最爲勝也。餘行不然。各守一隅。是以爲劣也。

此れに依つて見れば何故に彌陀は南無阿彌陀佛を選び取つたか。其の聖意凡人には容易に計り難いが、然し此れを二つの意味に解釋して見れば、一者勝劣二者難易の義である。彌陀佛はあらゆる徳を集めたるもので、其の功德

は内證と外用とを兼備したものであつて、自利の點からいうても、亦利他の點からいうても、是れが即ち勝つて居る所である。他の孝行慈善なども悪くはないが、それは唯一隅を守るに過ぎないから劣つて居るのである。且つ彌陀の名號を唱ふる位は、どんなに忙しい人でも出来るが、山や寺に入つて何十何年も修業せねばならぬ様な事は出来難いのである。故に此れは六ヶ敷いものを取らずに、易いものを取つたものであると明かに解釋してある。法然聖人は斯く觀じて實行の上にも其の意が現はれて居る。

法然聖人
東大寺

當時東大寺の造營の時其總ての監督をと言ふので法然聖人に其命が下つた時、聖人は彌陀の名號を唱ふるに忙しくして、寺院の造營は監督する事が出来ぬと言はれたので、更に其の弟子なりともと言ふ事になつて遂に重源を遣はされたのである。そして其の落成式の時は頼朝始め天下の名家高僧が集つ

て、盛大な式を擧げられた時、法然聖人も又參られたが、又一席の法話をして貰ひたいと頼まれ、辭退されたが聞かなかつたので、遂に立つて天下の大伽藍東大寺を賤しみ、天下のあらゆる宗教を否認せられた。それは「今東大寺の修覆就りて輪煥の美舊に倍するに至つたが、然し此の立派な堂は衆生を救ふに何の効力もない、其れよりも唯彌陀佛の稱名を一口なりとも唱ふる方が功德の最も大なるものである」と塙所柄をも頓着せず、唯彌陀佛あるのみと説かれたのは、全く聖人の自信力の大であつた事を示すもので、列座の面々は怪しからぬと思ひながら、然し聖人に對し反對の説を唱ふる者は一人もなかつた。

聖人は斯く自ら信じたのみならず、各宗大徳の前に選擇の理由を述べられて居る。聖人の此の正しい選擇が因をなして、其の開ける淨土宗は其の後全

國に盛んになり、茲に日本宗教史の一新生面は開かれたのである。そして從來儀式とが祈禱とか云つて、法の精神は疎にせられて居つた佛教界が、此に革新せられて純宗教が再び盛んになつたのは、實に源空上人の御蔭であると言はねばならぬ。

上人は斯の如く聖道教に對して彌陀教を選んだのであるが、尙其の選擇の根本は佛にある。佛は自ら第十八の本願を選ばれて居る。又此れを以て衆生を救ふの根柢とせられて居るのである、是が即ち選擇本願である。次に選擇讚嘆といふことがある。

無量壽經曰、

其有得聞。彼佛名號。歡喜勇躍。乃至一念。當知此人。爲得大利。即是具足無上功德。

無量壽經の選擇

此れ即ち選擇讚嘆であつて、一念でも二念でもよい彌陀の御名を唱へたものは、此れ即ち大利を得たものであると選擇本願を賞めてある。第三には選擇留教であつて

無量壽經曰、

當來之世。經道滅盡。我以慈悲哀愍。獨留此經。止住百歲。

此れが釋迦の金言である。即ち聖道の諸教が次第に滅盡し、行はれなくなるであらうが、其の時百年の間に限つて、この經が残るやうにしやうと釋迦が申されたのである。即ち今後世が次第に進んで行くのは一面墮落であつて五濁増時多疑謗とあつてお經が廢れ、幾多の宗旨が衰へて來れば、此の時が經道滅盡の時である。この時に當つて唯この經を留めてやらうと言はれ、多くの宗旨が衰微して行くのに引き換へ、獨り眞宗や淨土宗が榮えて行くのは

觀無量壽經
の選擇

其の根本茲にあつて又佛の豫言が適中したのである。この三つの理由によつて選擇せられたので決して法然聖人の勝手ではない。

又觀無量壽經にも矢張り選擇と言ふ事がある。

一、選擇攝取。

觀無量壽經曰、

光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。

觀無量壽經三選擇の第一は選擇攝取である。彌陀は如何なるものを攝取するか。これ諸行にあらずして念佛を攝取するものなるが故に其の攝取せらるゝものを選び取るが最も適切なものである。

二、選擇化讚。

觀無量壽經曰、

若念佛者。當知此人。是人中芬陀利華。

芬陀利華は眞白の蓮華である。若し念佛する人があつたならば、其の人は正に佛の攝取すべき人、あつて、一番立派な人間であると言ふたのである。觀無量壽經に於て諸有修業の道を説いてある中に特に末段此れのみを取り出して讚めてあるのは一番よいからである。

三、選擇附屬

觀無量壽經曰、

汝好持是語。持是語者。卽是持無量壽佛名。

此に南無阿彌陀佛の名號を、特に最後に繰返して言つてあるのである。極めて大事な大事なものである故に、再び此の語と言つて繰返してある。そして此れを末世に傳へよと阿難に曰はれたのを見れば、誠に大切な一番偉い

ものである。此れに依つても此れが如何に勝れ、如何に適切なるものであるかと云ふ事が分る。

阿彌陀經の選擇

以上の如く佛の教へにも大無量壽經と觀無量壽經とに各三つの選擇があるが尙又阿彌陀經にも一つの選擇がある。

一、選擇證誠

阿彌陀經曰、

一七日執持名號、必生彼國。十方諸佛。說誠實言。汝等衆生。當信。是稱讚不可思議功德。一切諸佛所護念經。

始終阿彌陀佛の名を信じ唱ふる者は、即ち立派に往生する事の出来るものにして、汝等諸佛より證誠せられたる名號を念じ、信せよとの意で唯彌陀の名を信じ唱ふる丈で足りて居る。證誠したと云ふのは選擇證誠である。

法然聖人の入信

此して諸佛から選ばれたものが、即ち此の淨土である。故に此の選擇は源空が勝手にやつたものでなく、釋迦其他諸佛の選んだものを選んだのである。即ち法然をして此れを選ばしめたものは、其の根本は此等の彌陀釋迦諸佛にあるのである。然して法然聖人が此の念佛の一事を選ぶに至つたのは、實に四十三の年にして法然十五の時比叡山に上り、才智衆に優れて居たので、源光叡空の二先生より其の一字宛を貰つたものであるが、後には遂に此の二先生とも聖人の弟子になられたのである。法然が出家をした理由は、自己の迷を離れて大悟徹底するにあつたが、天台は遂に空論にして實際問題を解決する事が出来なかつたから、聖人は更に山を下り其後南都に行き其他諸方に高僧大徳を尋ねて、苦心慘憺研究するけれども、まだ其の迷を脱する事が出来ないで、遂に故人先輩の意見に待つに若かずと、其の後は讀書三昧に耽つて

居たが、或る日經藏に入つて散善義と言ふ書を讀んで居る中會心の一句あり疑團此に解けて案を打つて喜ばれ迷を離れるには此れより外にないと言はれた。其の語は

善導、散善義曰、

一心專念彌陀名號不問時節久近。念々不捨者。是名正定之業。願彼佛願一故。

聖人大悟の一句はこれである。最初何の氣なしに讀んで居られたものが、何遍も繰り返して讀んで深く感ぜられたのである。即ち彌陀の名を信じ、時間長の短を問はず、一心專念に唱へて居ると、遂に自分の心は正しく定まつて、立派に往生する事が出来るのである。故に一心專念に名號を唱へてゐると如何なる迷も離れぬ事はない。煩悶し修業に苦しむよりも、唯稱名して捨

法賊

てざれば必ず目的を達すと、善導大師の散善義に書いてあつたのである。此あれば何も入らぬと、夫れより洛北の吉水に草庵を構へて、八十歳に至るまで一心專念に名號を唱へられて、遂に亡くなられたのである。

これが爲め法然聖人は南都の僧侶等より傷く惡まれ、彼れは元天台の僧であり乍ら、尙其れに背くは法の賊であると言つて、傷く迫害せられたのは彼のルーラルの迫害せられたと同じく、遂に勅命に依りて七十五にして讃岐に流され、爾後決して稱名する事は出来ぬと申し渡されたが、信教は自由であり、富貴も淫せず、威武も屈せず、死に至るまで一日も絶たれなかつた。又一般に布令が出て、彌陀を唱ふるものは斬罪に處すと云ふ事であつたが、其の堅い信念は動かすべからず、住連、安樂は其の立札を見た時、氣の毒である、思はず稱名して斬罪に處せられ、一死尙辭せず、西を拜して泰然とし

盜賊聖人に
教化さる

て歸するが如く逝いたものが二人ある。これは皆僧侶の讒訴に依るもので、當時關白兼實は病氣の爲め引籠り中であつたが、この事を聞いて涙を流して歎かれ、自分が居ればこんな事にはならなかつた、最早一旦布令の出た上は致方もない、綸言汗の如しだと言はれた、氣の毒なは聖人であるが、聖人は早や老體であれば、今後彼地に行かれてからは無不自由であらうと、出發せらるゝ前に身の廻りから其他一切必要なものは關白家より送られたが、其は極めて善美を盡したものであつた。

處が其れを見込んで出發の前晩、三人の盜賊が押入つて、此等の品物を頂戴したいと言へば聖人は自分も不自由であるが、かうして他人の家入つて来る所を見れば、餘程不自由であらうとて、盜賊に皆やつて仕舞はれたので賊は其れを力一杯脊負つて、山に入つて行く。聖人は其の後を追けて行か

歸結

れると、賊はお前が呉れる時の口上は立派なものであつたが、矢張惜しいと見えて追つて來たのであらう、と言ひ出したので、聖人は一旦遣つたものを惜むのでなく、猶やりたいものがあるから貰つて呉れとの事で賊はその上慾張つて、呉れと言つたので、聖人諄々として今お前が求めて居る所のものは唯今生限りの必要なものであるが、今自分がやると言つたのは未來永劫のものであるとて、盜賊の巢窟にて明日は流罪と云ふ前晩に大説教を始められ、盜賊もさやうな貴い方のものであつたかとして茲に悔悟し、三人とも淨土教の堅き信念に入つたのみならず、遠い讃岐にお伴をして行つた。

斯の如く宗教信念の貴い事は、その人をして唯安らかに笑つて斷頭臺に立たしむるのみにあらず、尙一席の法話に依つて絶大の感化力を有するものである事はこれを見ても知らるのである。法然聖人は斯の如く念佛の一念に

依つて大悟徹底し、一旦は世の迫害を受けなければ、其の高見は後に至つて田夫野人と雖も信仰の光に照されて居るのである。されば畏れ多くも上御一人より大師の名をお貰ひになつたのは二十餘人もあるが、圓光大師明照大師其他七つまで大師の名をお貰ひになつたのは法然聖人御一人である。今日聖人の教へが社會に全盛を極めて居るのは、全く聖人の信念が熱烈であり、其の教へが誠道である事を證明するもので、釋迦の教が腐敗し墮落して來た時に聖人の力に依つて始めて復活革新する事が出來たのである。聖人は實に斯の如く偉い方であつたが、この信念を得るまでに二十八年間も研究されたのを見ると、到底吾等が幾多宗教を比較研究し判別する事は、一朝一夕の仕事ではないのであるから、先づ吾等が信せんと思ふならば此等先人によつて研究せられ、選擇せられたものを選び取つて自らの信仰とするのが最も

必要な事であらうと思ふ。

水と自然美

降雨とその影響

水と自然美との關係を御話するに先立ちまして、先づ降水量の多少と其が地球上の各方面に及ぼす影響とに就いて一言しますれば、降水量が餘りに多量であれば第一土地が濕潤し、第二に草木が繁茂し過ぎる、第三に毒蟲多く、第四に健康に適せず、第五に土地が陰鬱である、之に反して降雨の量が少量に失すれば、土地は不毛となり、草木育せず、五穀熟せず、健康には矢張適せず、土地は頗る荒涼となる、それから降雨の量が多からず少からず丁度適量であるときには、土地は肥沃で、草木は繁茂し、五穀豊熟、健康佳適、而

自然美と分類

して幾多の美觀を現出すると云ふことに成るのです。

偕て自然美を分類しますると

一、水に關係なき自然美

二、水の作用が關係ある自然美

三、水の變態に依れる自然美

以上三種に分類することが出来る様です、其第一に屬する者、即ち水に關係の無き自然美、と申しますのは、例へば蒼天の色、朝暉、夕照、極光、黃道光、蜃氣樓等の類で、第二の水の作用が關係ある自然美と申すのは、例へば岩石の削剝、花、紅葉、新緑、山紫水明の好風景等で、所謂日本の三景などは此部類に入るのです。次に第三の水の變態に依れる自然美と申しますのは、雲、霞、霜、雪、霧、露、霽、霰、霰、虹、暈、光環、川、海、湖水等は此部

八個の理由

類に入ります。

次に水の作用の地球上、及ぼす勢力の偉大なる所以に就ては、凡そ左の八個の理由がある様です、即ち其第一は、水が世界に存在する分量の莫大なることで、地球の約三分の二を占領して居る位だから、其作用の偉大なことは申す迄も無い譯です、第二には水、其化學的成分が單純で、而も頗る強固なる化合物(Sable Compound)である爲で、第三には、高温に於ては其兩成分が分離して強き酸の作用を現はす爲、第四には、水は固體を溶解し、又瓦斯體をも溶解する如く、殆んど凡ての物質を多少溶解する爲である。假令は黄金の如きも、多少海水中に溶解して居るのです、次に第五には、温度の狭き範圍に於て、固體、液體、瓦斯體の三態に變化をなすが爲である、温度の狭い範圍と云ふのは、攝氏の零度から百度に至る迄の比較的狭い範圍に於て

凝結の三種

であります、次に第六には、水は凡ての化學的變化の仲媒をなすが爲で、第七には、熱を得ることも遅く、又熱を失ふのも遅い、即ち語を換れば、比熱の大なる爲である、比熱と云ふのは、或一定の單位體積の物體の溫度を、攝氏一度丈上げるに要する熱量の割合を云ふのです、次に第八には水は流動體及び固體を爲して、天然に存在して居る爲であります、以上の如き種々の原因あるによりて、水の作用が地球上に偉大なる勢力を及ぼす事になるのであります。

水に依つて現出する自然美は、大氣中にある水蒸氣の多少に依つて變化を爲す者ですが、其蒸氣が一部の凝結を起す場合に、大要三種あるのです、其一は、大氣中の水蒸氣が寒冷なる物體に觸れるか、若しくは輻射に依つて熱を發散し冷却するとき、其二は、上昇氣流に依つて壓力が急に減する時、斷

雲の種類

熱的に膨脹し、爲めに冷却する時、其三は、溫度を異にして居る氣流が混和して冷却する時等です、而して此内(一)と(三)とは、同時に起ることが多い者です。

扱て大氣中に現出する自然美に就いて、少しく説明を加へて見ますると我々が最も普通に見るものは、天上の雲ですが、雲にも種々の種類があります、即ち其一は卷雲(Cirrus)で、晴雲に懸かる羽毛狀の雲を謂ふのです、之は多分、細小なる氷片だらうと思はれますが、通常地上九千乃至一萬米突の邊に浮遊して居る者です、次に第二は積雲(Cumulus)と云ふので、之は積累して綿の如く、形は山の様になつて居ます、通常地上二千乃至六千米突の處に在る者です、次に第三は層雲(Stratus)と申すので、之は層狀をなして棚引く雲を云ふのです、高さは前の積雲と同じ位です、次に第四にありまするは、亂

雲 (Nimbus) と云ふので、之は暗黝色を呈し、濃密不定形の雲であります、その高さは地上二千米突以内を常とします、次に普通なのは、霞、霧、濃霧ですが、此等は何れも大氣中の水滴で、其位置と濃淡の相違に依つて、斯く三様の名稱を有して居るのです、此中霧は、塵埃の多い所に生じ易い者と成つて居ります。

凡そ大氣中の水蒸氣は、其凝結するに當つては、空氣中の細塵を核心 (Nucleus) として之に依つて凝結するものですから、村落市街等の如き人烟の多い處は、殊に霧や濃霧が多いのです、此の塵埃が水蒸氣凝結の因を爲すと云ふに就きまして、世に人工降雨法と云ふ事が行はれます、即ち旱天に惱まされたる農民が、神官に頼んで雨乞の祈禱をするのも、小野小町が雨乞の歌を詠むなども、其一方法であります、爰に理學的的人工降雨法とでも云ふべき

塵埃と水蒸氣

は、盛んに火を山上に燃やすとか、或は大砲を空中に發射するとか云ふ方法で之は何れも大氣中に細塵を多からしめて、此等の塵埃を核心にして、水蒸氣の凝結を促す方法に外ならないのです、又北海沿岸並に朝鮮沿岸の濃霧の親潮寒流や、來滿寒流に伴ふのは、之は東南の方から來る暖濕風が、寒流の區域に至つて、水蒸氣の凝結を起すに依るので、其が陸近くに多いのは、塵埃の多い爲です。

落つれば同じ谷川の水と成るべき大氣中の水蒸氣が、雲と成り霞となり霧となり濃霧となつて、現出することに就いては、既に述べた通りですが、更に形を變じた者が、露、霜、雪や氷となるのです、地上の星かと怪しまれ、貫ぬき留めぬ珠と疑はるゝ露は、冷却せる草木の葉に空氣が觸れて、其の中の水蒸氣を一部凝結させた者です、霜は水蒸氣より直に凍結し地上に布けるも

雪と史蹟

の、それが殊に晴夜に多いのは、輻射冷却の強盛なる爲である、而して秋の始めから春の始めに至る間に多いのは、長夜冷却時間の長い爲です、繽紛毛に似たる雪は、気温の水点(攝氏零度)以下に下つた時に、大氣中の水蒸気が凝結して、瓦斯態より直に昇華作用に依つて結晶したもので、斜方六面體の集晶六出状に集まつて居るのです。氷雪の集塊は氷河氷山水原等に成つて現出しますが、其景物の雄偉にして奇抜なること、實に名状すべからずです。雪は王者の宮殿も、賤が伏屋も一夜の内に白皚々たる銀世界と化せしめ、寒窓に映じては終に不夜の城を成し、枯木に懸かつては忽ち爛漫の花を成す其雄大にして平民的なる處、詩人の繡腸を動かす又宜なりと申さねば成りませぬ、殊に歴史の背景を成して、詩的の實を一層詩的ならしむる所、到底他の景物の匹敵し能はざる所であつて、立德が雪を冒して孔明の草廬を訪ひ、

水の變形

奈翁は露國遠征に雪に苦められて絶代の雄圖を敗る、扱ては日清の役中、蓋平の激戦あり、元祿四十七士の雪夜の仇討、萬延元年櫻田門外の血染の吹雪、謡曲鉢の木、雪の夕暮、常磐の雪中哺乳。憲法發布盛典の雪、日露役中黒溝臺の雪中戦等、數へ來れば實に限りもありませんが、若し是等の史蹟より、雪てふ背景を取り去つたならば、如何に落莫蕭條たる物でせう。次に雪の變形とも申すべき雹は、核心と成つて氷片の周圍に、氷と雪との層が交互に被覆したもので、之が大氣中に上下して大きくなつたものです、雹は雷雨に伴ふことが多いのです、實は雪の一部分溶解したものです、次には光環(Corona)暈(Halo)虹(Rainbow)等に就て一言申して置きますが、此等は太陽又は月の光に依り種々の色彩ある環を生じたものです、光環の方は、内側が藍色で、外側が紅く、暈は内側赤く外側が藍色です、暈は高所に

雲を成して小氷片に、光線が當り反射屈折して出來たもので、光環は大氣中にある大きさの様な水滴に光が當つて、擴散(Diffusion)を爲すに依つて起つた處の現象です、虹は空中の水滴に光が當つて、反射屈折及擴散することに依つて起る現象です。

斯くの如く自然界に於ける四季折々の美觀は、要するに濕的美か乾的美かの何れかに屬するもので、乾的美は主に大氣中の細塵に依りて起り、濕的美は大氣中の水蒸氣に原因するものである。

春の美

彼のほのくと明けゆく東天に、紫色又は淡紅色の層雲が淡く或は濃くなびける有様は、清少納言をして、「春はあけぼのそらはいたくかすみたるに、やう／＼しろくなりゆく山際のすこしづゝあかみて、むらさきたらたる雲の淡く濃くなびきたるなどいとおかし」と嘆賞せしめたるもの、これ實

に春の曙の美である、又吹く風にもはふ長閑なる彌生の空に、遠近の山野は淡き霞の中に包まれて、之を望めば恍として花の如く、若緑の萌え初めたる野邊に、かげろふの舞ひ遊べる有様は、古歌に

はる霞色のちぐさに見えつるはたな引山の花のかげかも
と詠じ、或は

かすみ立つ春の山邊はとほけれどふきくる風は花の香ぞする。(元方)

吉野山花さくころはあさなく心にかゝる蜂の白雲

と歌はしめたる光景で、實に春の日の美である、又月影もおぼろにかすみて夢の如き心地せらる頃、かんばしき暗香のそこはかどなく浮動する風情は、眞個に

梅の花にはふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける。(貫之)

夏之美

月夜にはそれとも見えす梅の花香をたづねてぞしるべかりける。(躬恒)
と詠みたる所以であつて、是春の夜の美である。

又真綿の如き白雲の大空に顯るゝことや、暫時の夕立に草木も欣々として
生氣を恢復し來り、日頃の炎熱も忘れられて、徐に清冷を覺ゆる頃、黑暗憺
たる亂雲の中に、錦の帯の如き虹が懸かりてあかき夕日と反映する有様は、

歌人をして

吹く風もにはかにすやし夕立の雲にまよひて秋やきぬらむ(宣長)

見るがうちも雨きはひきて夕立の雲にかくるゝ嶺の松原(蘆庵)

と叫ばしむる所以であつて、真に夏之美である、尙秋之美は、露と霧とによ
りて添へられ、冬之美は霜と雪とによりて現るゝことは、次の古歌のよく證
明する處である。

秋之美
冬之美

あきの野におくしら露は玉なれやつらぬきかくる雲のいとすぢ(文屋朝康)

朝がほのやゝ咲き出し露のうへにしばしはやざる有明けの月(千蔭)

白露のいろはひとつをいかにして秋の木の葉をちやにそひらむ(利行)

川ざりのふもとをこめてたちぬれば空にぞ秋の山は見えける(深養父)

秋山のふもとをこむる秋ざりは裾野の萩のまがきなりけり(伊家)

月はいりて庭のかり生にしばし猶のこれる影は霜にぞありける(千蔭)

たとへてもいはんかたなし月かげに薄雲かけてふれる白雪(仁和寺入道)

朝日かげまづさすかたの片枝より色あらはるゝ松の白雪(枝直)

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし(友則)

斯くの如く、大氣中の水蒸氣は種々に状態して天然界に幾多の美觀を現出

するのであつて、人が日常この種々の天然美を觀察して、起す所の感想を歌

天然美と國民性

ふたものが、即ち詩歌で、繪畫彫刻等の美術工藝も、亦この美の感想が根本である。

我邦は山川風物の秀麗優美なること、他に其比無く、夙に世界一般の嘆賞して措かざる所であるが、是は四方海によりて取りまかれて居て、自然大氣中に水蒸氣が多くある故、其水蒸氣が雲となり霞となり其他種々の變態を爲して、風景の美を添ふると云ふことは、頗る偉大なるものであるに違ひない従つて我日本國民の氣象も這般の天然の美に涵養せられて、特に優美高潔となり、一方には和歌の感興となり、又美術工藝の發達を促したと云ふのは、全く偶然ではないと云はねばならぬ。

自然法爾

佛教と自然

近頃世間で自然主義といふことが八釜敷くなつたので、自然といふ詞を聞けば、直に自然主義に聯想を及ぼして、一種不快の感を起し易いが、元來自然といふは結構なことで、決して獸欲の蠻性其儘を打出すやうな下等な意味では無いので、是を劣等な意味に用ふるに至つたのは、甚だ歎かましい事である。

抑も自然といふは、即ち自然界の有の儘をいふので、柳は綠、花は紅、鳥のカーカー、雀のチュチュが皆是自然である。この自然其儘で、更に粉飾や虚偽の無い所が、即ち萬有の各本來の眞面目を發揮した有様で、禪宗の所

謂見性成佛といふのは、吾人本来の眞面目をサラケ出すの外はない。元來眞如法性の眞理は、普遍絶對で、不二不二者あるから、一切衆生悉有佛性（涅槃經）で、唯一乘法無二亦無三である。只無明の塵翳が、一如の明鏡を覆うて居るから、元來の明煌々の光が顯現せず、萬象の實性を其儘照破する事が出来ぬのである。是が即ち迷である。故に佛教の大目的たる轉迷開悟の要は、只無明の塵翳を拂ひ去りて、本来一如大圓明鏡の光を發揮するにある。即ち自然の妙境に體達するにある、是は決して禪宗ばかりではない、廣く顯密に通じ、大乘諸教の通義である。

淨土門と自然

聖道諸教に於て、自然を談するばかりではない。淨土教に於ても、亦自然といふことがないではない、大無量壽經には、自然德風徐起微動とあり、或は百千音樂自然而作とあり、又無有三塗苦難之名、但有自然快樂之音、是故其國名曰ニ安樂と説かれてあり、又清風時發出ニ五音聲、微妙宮商自然相和とあり、或は亦有ニ自然萬種伎樂と説き、皆七寶莊嚴自然化成と示し、調和冷煖自然隨意とも、波揚ニ無量自然妙聲とも、百味飲食自然盈滿とも、意以爲食自然飽足とも、皆受ニ自然虛無之身とも説かれてある。極樂淨土には自然の快樂が多である事が是でも判かる。獨り淨土の莊嚴や音樂が自然であるばかりではない。元來淨土門他力教の極意は自然法爾である。佛の誓願の不可思議力に委せて、我等の力やはからひを少しもまじへざるのが本意である。故に末燈抄第五自然法爾章には、

自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、然といふはしからしむといふことばなり、しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに、法爾といふ、法爾はこの御ち

かひなりけるゆへに、行者のはからひのなきを以て、この法の徳のゆへに
しからしむといふなり、凡て人のはじめてはからはざるなり、このゆへに
義なきを義とすと知るべしとなり。

といふように叮嚀に示されて次に

自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり、彌陀佛の御ちかひ
の、もとより行者のはからひにあらすして、南無阿彌陀佛とたのませ給ひ
て、むかへんとはからはせ給ひたるによりて、行者のよからんともあしか
らんとお思はぬを自然とは申すと聞て候ふ、誓のやうは、無上佛にならし
めんとかひ給へるなり、無上佛と申すはかたちもなくなします、かたち
もましまさぬゆへに自然とはまふすなり、かたちもましますと示すときには
無上涅槃とは申されず、かたちもましまさぬやうを知らせんとて、初めて

阿彌陀佛と申すとぞ聞きならひて候ふ。

と、くりかへし自然の妙旨を説明して最後に

彌陀佛は自然のやうを知らせんれうなり、この道理を心得つる後には、こ
の自然のことはつねに沙汰すべきにはあらざるなり、常に自然を沙汰せば
義なきを義とすとといふことは、尙義のあるになるべし、是は佛智の不思議
にてあるなり。

と結んで、妄に自然を云爲することの誤解と弊害とを深く誠めてある。聖賢
の卓見は實に驚くべきものであつて、其後昆に對する教訓の懇切周到なるこ
と寔に感佩の至りである。

宗教と科學

以上述べた所を綜合して見れば、大乘佛敎は自然宗教であつて、就中淨土
敎は自然宗教であるといふことが出来る。尙一步を進めて考ふるに、凡ての

學術は分析
宗教は綜合

宗教は、拜火教でも、拜日教でも、凡て自然を離れて成立するものではない。吾人が自然界を観察し、自然界と吾人との結合によりて、茲に宗教心が起るのである。獨り宗教が自然界を観察することによりて起るのみならず、科學哲學の如き凡ての學術知識は、亦皆吾人が自然界を観察するによりて起つたものである。就中科學の研究は自然界である。自然界を離れて科學は成立せぬ。自然界を観察研究して、其間に存する天則を發見するが科學の目的である。故に自然科學と名づけるのである。

學術も宗教も、自然界と吾人人類との間の關係で成立するもので、何れも人の心の要求發動によりて起つたものであるが、其方面を異にして居る。則ち學術は智の方面で、宗教は情の方面である。學術は分析的で、宗教は綜合的である。學術は何處までも懷疑を以て其研究の歩武を進むべきもので、宗

人は人、獸は獸

教は信仰によりて究竟の満足を得べきものである。故に學術には常に不審不安の念がつき纏うて離れぬが、宗教には安慰と満足とが必ず起つて來る、學術は道理詰で冷やかなるものであるが、宗教は愛や慈悲の溢るゝ暖かなものである。假りに人身に譬へたならば、學術は神經系の如きもので、宗教は循環系の如きものである。神や佛陀の愛や慈悲の温かき血液が、常に其中に行き互つて居る。

故に吾人は、學術研究のみでは不安懷疑に陥りて、究竟の精神的安慰は決して得らるゝものではない。是非信仰によらねばならぬ。學術研究の究極する所は、自然の妙用に結歸せざるはない。例せば人類の胚は遂に發育して必ず人と爲り、鳥獸の胚は遂に發育して必ず鳥獸と爲るの如何なる作用に依つてであるか。何故に梅の木には必ず梅の花を開き、櫻の木には必ず櫻花

誓願の徴表

を開くか、是れ學術研究の尙ほ及ばざる所にして、自然の妙用に歸するの外はない。之を自然の妙用として信じ、更に不安懷疑の念を起さぬは、是即ち宗教の範圍であつて、既に學術の範圍では無い。一たび宗教眼を以て自然界を観察し來れば、森羅萬象事々物々、一として絶對無限の理想の顯現ならざるは無い。是を真如とも、法性とも、大日とも、彌陀ともいふのである。

今且らく吾人の信奉する淨土教に就ていへば、火の燃るのも、水の流るるのも、花の咲くのも、鳥の歌ふのも、皆是南無阿彌陀佛ならざるはなく、彌陀大誓願の顯現ならざるは無い、無機界の發展は、無三惡趣の誓願の現はれであつて、動植物の進化は、若不生者の大悲弘誓の徴である。故に花の希有の色に開くのを見ても、七寶樹林の淨土の莊嚴を聯想せられ、波の實相の音を揚ぐるを見ても、際涯なき生死の苦海に無始以來久しく沈淪せる我等を救

誓願の發動

濟し給ふは、只彌陀弘誓の大願船のみなるを深く感謝せざるを得ない。

吾人が誓願の不思議に救濟せらるるに際しては、何等條件を要せず、何等凡夫自力のはからひを要せず。

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず
 佛智無邊にましますば 散亂放逸もすてられず。

無上寶珠の名號と、眞實信心一つにて、如何なる無智のものも、如何なる罪惡の輩も、悉く救濟にあづかることを得るので、是が即ち他力教の自然法爾の妙旨である。而してこの彌陀大悲の誓願力によりて、救濟せられたるものは、必ず諸苦毒中忍終不悔の佛陀の心を體し、感謝の衷情より、積極的消極的にあらゆる道德的行爲が大に屬まるゝのみならず、自利利他の博愛慈善の活動も、盛に務めらるゝ道理である。是亦自然の發動である。されば

向上的自然主義

學術宗教に向つて向上發展するのは、是れ自然法爾であるが、これと同時に其反面に於て、吾人人類が種々の欲を起し、動物性に從つて、罪惡を犯し、墮落する有様も、世間普通の状態であつて、亦是自然でないとは云はれない以爲ふに、吾人人類は、佛と惡魔との中間にあつて、この兩面を具備するものであつて、何れの方面が著しく現れても、自然は即ち自然である。佛面の方の顯現は即ち向上的自然で、魔面の方の顯現は向下的の自然である。而して萬物自然の極致は、向上にある事、佛陀の誓願の上よりも明了であるから、眞理に契合せる、然主義は、必ず向上的でなければならぬ。向下的の自然主義は、眞理に乖て居るから虚偽である。今情々世上に流布する所謂自然主義なるものを見聞するに、動物的放肆的であつて、慥に向下墮落的である。斯くの如きは虚偽の自然主義であつて、眞の自然主義は神聖にして向上

的でなくてはならぬ。吾人は斯くの如き虚偽の自然主義に惑はされず、眞の自然法爾の他力の救済によりて、大慰安と大満足を得て、感謝の誠意より自利利他の大行を怠ることなく、日夜向上の道に奮勵せねばならぬ。是予が宗祖の誠めを犯し、敢て茲に自然法爾を號呼する所以である。

下 編

— 次 目 —

— 佛敎史上より見たる元寇……………	二八九
— 豊臣徳川二氏と東西本願寺……………	三一五
— 弘法大師の偉業……………	三三〇
— 開年に就て……………	三四〇
— 地球の年齢……………	三四六
— 元日に就て……………	三五三
— 信仰の妙味……………	三六〇
— 現実と理想……………	三六九
— 水火に就て……………	三九二
— 地質概念……………	四一一

自然科學と宗教 下編

佛教史上より觀たる元寇

歴史は勇者の記録

從來の我國史は主として政治史に限られ、文學、美術、宗教、産業等の歴史に至りては、一般人士より冷然觀過し去られたる形跡あり、従つて重要な史實さへも、湮滅して傳はらざるもの頗る多きは、識者の深く遺憾とする處たり、加之政治史も十中の八九は優勝者の側に於て編纂せられたるものにして、劣敗者の側に於ける史實は傳はらざるもの多くして、容易に當時の真相を窺ふこと能はず、所謂勝てば官軍、負けば賊たるを免れざるの觀なきにあらず、抑も社會の真相は到底只一方面的觀察を以て洞見すべきものにあ

元寇研究上の不備

らず、各般の方面に於ける表裏両面の精細なる観察を綜合し來りて後、初めて稍正當に近き判断を下し得べきは、古今東西全然其規を一にせり。

就中元寇の如きは、我國史上に於ける重大事件の一なれば、成るべく廣く各種の方面より觀察するに非ざれば、當時の真相を闡明する能はざるは火を賭るよりも明かなり、然るに従來の元寇が、主として政治上又は軍略上にのみ、重きを置かれたる結果、宗教上よりの觀察の如きは頗る等閑に附せられたるの觀あるは遺憾の至りと謂つべし、故に予輩は茲に聊かその方面の觀察に就て述ぶる所あらんとす。

元寇當時の文書

山田安榮氏の編纂に係る伏敵篇に引用せる書目中、本邦書凡そ三百九十三種外國(支那朝鮮共)書凡そ七十六種あり、其中佛教に關係あるもの本邦書約四十八種に達せり。

鎌倉の兵馬京都の新蔵

佛教史上より觀たる元寇

元寇當時に於る我國佛教の中心地は、京都及び鎌倉附近にして、京都附近には南都北嶺及び高野山あり、之を宗旨上に分類すれば、南都(奈良)は法相三論、律、華嚴を雜へ、北嶺(比叡)は天台にして鎌倉は禪宗最も勢力ありたり、又當時の文書の今尙傳はれるもの、二三を擧ぐれば、南都には東大寺尊勝院文書、興福寺略年代記、東大寺別當次第等あり、北嶺には華頂要略、天台座主記等あり、高野山には高野春秋あり、京都東寺には東寺百合古文書、東寺牒、東寺年代記、東寺長者補任等あり、鎌倉には大覺佛光兩禪師語録を始め、五山文書あり、又一般の傳記傳説類には、本朝高僧傳、元享釋書、瑤囊抄、古今著聞集、八幡愚童記、八幡愚童訓等あり、參考に資すべきもの固より尠からず。

是等の文書に記載する所を綜合するに、元寇前より數十年の後に至るまで

神佛に對する祈禱の最も熱烈旺盛を極めたるは、京都を中心とせる南都北嶺の諸社寺にして、高野山は之に次ぎ、鎌倉は京都附近に比しては、祈禱熱烈ならざりしが如し、是當時兵馬の權は全然鎌倉にありしを以て、鎌倉は兵馬を以て元寇に對抗せん決心あるも、京都附近に於ては、全く兵馬を以て對抗することを得ず、一向に神佛に懇請し、其威力に信賴するの他途なかりしに由れり。

祈禱の状況

今京都粟田口青蓮院の記録たる華頂要略(享保年中同宮坊官前加賀守入道法印大和尚位爲純本名爲善が同院門主入道一品尊良親王の台命により輯せしものなり本文總じて一百五十卷あり)によりて當時祈禱の状況を窺へば左の如し。

(1) 文永元年甲子六月二十七日爲_二彗星御祈_一於_二本坊_一始_二修文殊八字法_一

(2) 文永五年戊辰閏正月十一日於_二禁中_一爲_二異國降伏御祈_一修_二藥師法_一

(3) 文永六年己巳七月二十六日於_二五條内裡_一爲_二天變御祈_一始_二修五壇法中壇_一

(4) 文永十一年甲戌十一月二日異本七日爲_二異國降伏御祈_一於_二本坊_一修_二金輪法_一

(5) 文永十一年甲戌十一月三日爲_二異國降伏御祈_一始_二修尊勝法_一

同月十八日爲_二同御祈_一始_二修四天王法_一

(6) 建治二年丙子正月十六日爲_二異國降伏御祈_一於_二仙洞_一始_二修熾盛光法_一

(7) 建治三年丁丑十月日異國降伏十二社御祈之内日吉社分被_二仕之_一

(8) 弘安四年四月八日於_二根本中堂_一爲_二異國降伏御祈_一修_二七佛藥師法_一

(9) 弘安四年辛巳六月八日於_二大成就院_一爲_二異國降伏御祈_一修_二如法金輪法_一

(10) 弘安五年壬午七月日異國降伏御祈修_二八社本地供_一(准_二三宮法務前大僧正道立仕之_一)

(11) 弘安六年癸未七月日爲異國御祈修八社本地供(道立仕之)

(12) 正應二年己丑六月二十五日被下院宣

異國降伏御祈事可下令抽懇丹給上之由 御氣色所候也以此旨可下令申
十樂院僧正御房給上候仍執達如件

六月二十五日

權中納言忠世

三位法印御房

追申 如浮説者今年可襲來歟之由。其聞候。御進退末寺等同可有御
下知候。致沙汰兮。且委可下令注進給上之由被仰下候。以此趣
可下令申沙汰給上

十月四日將軍久明御祈事被下内々 院宣

(13) 正應三年甲寅四月二十五日 院宣到來蒙古之凶賊今年有觀觀之疑 云云

御祈事兼日可有其沙汰限三七日抽無貳之懇丹可被祈請申之由院
宣所候也仍言上如件 俊定恐惶謹言

四月二十五日

參議 俊定奉

進上 十樂院僧正御房政所

(14) 正應五年壬辰十月朔日於禁中爲天變御祈修如法北斗法

(15) 永仁元年癸巳三月十四日爲異國降伏御祈於鴨社始修天玉法

(16) 永仁元年癸巳三月廿二日於二條富小路内裡爲異國降伏御祈始修大
熾盛光法

(17) 同年六月十八日爲異國降伏御祈始修金輪法

(18) 同年十二月十九日爲彗星御祈始修金輪法

(19) 同年十二月廿三日於本坊爲天變御祈始修如法佛眼法

永仁二年以後の文書

元主忽必烈は永仁二年甲午正月二十二日殂し孫鏡木耳宗嗣立し、東侵の計畫を罷めたり、是迄の間は元兵襲來の風聞頻々たるものあり、其都度降伏の祈禱を下命せられたるは、前段に引證せる文書によりても明かなるが、永仁二年以後は、異國降伏祈禱の記事なきを見ても、襲來の風聞亦全然其跡を絶ちしを察知するに足る。

南都の祈禱

次に異國襲來祈禱注録に據り、南都に於る祈禱の模様を考察するに、文永元年八月五日、爲異國降伏祈禱南都西大寺に勅使有下向。其宣旨備。天王寺、教興寺兩寺者。同時建立之大伽藍。爲吾朝佛法最初之寺院。仍代々帝。本朝異朝雖異爲朝敵降伏之靈地。昔孝謙天皇以來。異國襲來之時者。必兩寺有行幸被行仁王大會。則異賊退散。今任舊例四天王寺教興寺行幸有之。八月六日於天王寺金堂而被修仁王大會。導師者西大寺思圖上人。供

奉僧百餘人也。同七日教興寺有行幸。次八日於講堂千手寶前之靈地。被行仁王大會。此夜亥刻。大船百餘艘破損之由。自壹岐對馬注進在之云云。弘安四年初七月二十日異賊調伏祈禱之事。勅使光泰卿。南都西大寺下向再三也。宣旨狀被納西大寺一畢。同七月二十七日。異賊之船。既九州太宰府博多津入之由注進在之。同廿八日。西大寺思圖上人依勅教興寺下向。次二十九日於講堂千手寶前。被行三百座大仁王會。即座千手千眼經被講之時。此經文陀羅尼神妙章句。外國怨敵即自降伏各還。政治國土云云。此文句三遍誦被講之。四天王動搖。千手面目放光半時許也。講經畢。本尊光止給。其時貴賤萬民致渴仰歎未曾有云云。同晦日。山城國男山八幡宮參籠。觀尊上人之供奉僧八百餘人。同自閏七月一日至七日。每日二時。八百座仁王講被行之。夜分間。七壇之護摩被勵修之。中略字佐宮八幡御託宣。爲降

佛敎史上より觀たる元寇

伏異賊。日本國中大小神祇。只今太宰府博多金津向畢。異賊破滅時刻。今夜之夜半也。注進狀云異賊滅亡者子刻。船之破損者丑時也。弘安四年閏七月九日注進云云更に高野山開創以來、享保三年迄九百餘年間の編年史たる高野春秋に據り眞言宗に於ける祈禱の狀況と元寇に關する一般の史實とを考察すれば左の如し。

(高野春秋は、高野山第二百七十八世、檢校執行法印大和尚位春潮坊懷英が、享保四年の編纂にして、十九卷あり、高野山に於て門外不出の珍本にして、伏敵篇にも引用なし)

- (1) 文永八年辛未九月。元使趙良弼來朝。捧呈牒狀。不及返簡。是依書法無禮而責中來貢之事。是爲十一年。詔天下之寺社。令致下。是賊降伏之惘禱上之起本也。
- (2) 文永十一年甲戌三月詔諸寺社類令惘祈異賊降伏之大法

考。八年已來數般雖元使來聘終不報書。今般也。元帥忻都會及。高麗洪茶丘等。將二十萬五千甲。乘大中小兵船九百艘。爲本朝來犯。到對馬之旨。告上京都鎌倉。于茲西國將卒能防戰。故元軍不克勝進也。

依奉驚上聽也。○元軍糧乏掠奪津々浦々穀稈而歸帆。

(3) 建治元乙亥二月日元使杜世忠及高麗人來著博多津。任應書。贈遣三使於鎌倉。然亦不及反書速令歸國焉。

(4) 建治二年丙子夏四月日。元三使重來著長州濱。召寄之鎌倉。於由井濱刎首。是所謂立春送歸三使之時。命曰若重來者。不得保命歸上。然背國命故如斯也。乘船徒士卒等。無恙歸元國。此事四年一山靈尊高僧。建前鹿島。日夜爲致異賊降伏之大禱之起本。

(5) 弘安三年庚辰二月令天下諸山寺。抽異國降伏之惘祈。是先年二年殺元

使杜世忠於鎌倉。故元帝憤激欲攻討本朝之軍用傳聞故也。當寺僧中爲二百八口之願番役。而交齊天野宮。悃祈異賊降伏也。

(6) 弘安四辛巳年春正月朔。第七十世執行檢校法橋上人位靜辨朝拜。執行代長任蓮日房。蓮乘坊主也。此夏爲異國降伏祈禱。○(虫食恐導)字賦。一本作(運)。師南院。主。賢隆及長任赴筑前國博多府。供奉兩院不動尊。而安置鹿島。到大觀。今月異賊發三元國之旨。風聞本朝。都鄙萬民怖畏矣。是以軍勢下筑紫。

(7) 同年夏四月日自鎌倉殿見獻。弓箭御劍幣帛等於天野宮。是酬去五日十二日兩般神託注進也。太政官符拜天野記云。神靈託巫曰。日本國神々發向蒙古軍。任先例者。來廿八日丑刻也。以唱火界咒。可增神威光。來六七月。本朝可成安全云云。差早馬。建之京都御倉。仍任神託。被送獻弓箭御劍等。未幾異國賊船襲來于肥前筑前津々浦々。和兵防之。天下大騷動矣。

廿一日天野社頭數千之群鳥。只殘一双。悉飛去矣。廿八日曉。神殿鳴動。奇光燦奕。是蓋大明神出陣之瑞乎矣。

(8) 五月日。詔當山及諸神社。令抽異賊降伏之悃禱。仍供奉南院不動明王於筑前國鹿島。執行五壇大祓法。中壇御導師長者兼座主醍醐僧正定濟。片壇南院阿闍利賢隆。蓮上院入寺長任等也。外二僧傳史未考之。是任二院宣及鎌倉殿御教書也。考。此尊也。大御歸朝之時。爲船中安坐。風降伏。將來之。爲安國之願將。然將門追討之時。勸請尾之熱田社頭。册降伏之本尊。而東夷大治。任此吉例。今又如斯。

○東請祈之事出天慶六年之傳。

(9) 五月廿一日。元將阿刺罕。范文虎及高麗人忻都。洪茶丘。以兵船四千艘甲士廿四萬。漂集博多澳。與和兵相挑。有茲于日。□□□(考虫食一作至今山史云。舟師對陣之間。舟壽之外。進火烟于波上。或又彩龍與雲兮。神箭漂波云云。

(10) 秋七月二十八曉。攝州廣田社巫女詣天野宮。俄然神託。巫曰。於今度者。住吉八幡。屬我方。致征討。若託我親示此事者。世以可爲疑。故以汝告示。自非真言之教力。疑施降伏之靈驗云云。此一件亦詳用子官符。

佛敎史上より觀たる元寇

(11) 閏七月廿九日。暴風簸搖元船。碎散如落葉漂波。元帥等纔三人免歸矣。
國史云。元帥之内。唯助。扶于。園。莫。青。吳。萬。五。之。三。人。而。令。歸。元。是。爲。和。兵。勇。猛。之。軍。談。也。

(12) 八月七日。元軍士猶漂浪平戶五島邊。者三萬餘甲。和兵進討。慶之凱歸陣。山僧亦護持本尊歸山也。
明王還御之時。留大船於鹿島。蓋是依明王之示現。爲○考爲東鎮。留持劍。爲西鎮。殘大船形。異國鎮壓乎。又自武家。被三備請。乎。尋。求。島。僧。未。明。也。

(13) 弘安七甲申年二月十一日。永寄賜泉州近木庄於天野宮祭奠料。是爲去四年異賊降伏之神勳報賽也。
寶簡集云。寄附狀。爲聖朝安穩異國降伏。殊有御祈願。所被。避進也者。依鎌倉殿仰。所奉寄如件云云。是所謂豐田天皇異國對治之時。稱三當社。靈驗。寄之地例也。

(14) 閏四月廿一日。天野社鳥殘一雙而悉飛去。同曉三谷酒殿扉自然開。神馬鈴音指西去行之由。神主等注一屆之。仍任去。四年夏之嘉例。宿老分

影堂衆分。一同出任。點七個日。抽懸祈上三卷數之旨。所仰披達於

公廳神主常家。兄弟道佛。同注進之。
是爲來年元兵劫去。西國海鳥之起本。

(15) 弘安八年乙酉冬十月太元國將阿答海爲左將。以劉國傑陳巖爲右將。及高麗左蒸洪茶丘等。率群兵。乘數千艘。來伐日東。是報元國至元十八年日本後字多。弘安四年已。破軍之役也。然劫掠海西島嶼處々濱村。而速歸帆。是怖畏

本朝之武威之故也。
案。去年五月廿一日。天野宮并酒殿奇瑞。于此。誠我大明神之靈驗。不可不信也。

(16) 永仁二甲午年夏四月廿日。鎌倉相摸守貞時。陸奥守宣時。命高野山僧中納言法印金剛三昧院主。隆禪官名也。令勤修異國降伏之御祈於丹生社頭也。

以上之高野春秋の記事の内、注意すべきは忻都、洪茶丘の二人が高麗人と爲せることにして當時この二人は、元主忽必烈の命によりて、高麗に駐劄し高麗軍を率ゐて我國に來りたるを以て我に於ては高麗人と想ひしなり、次に面白きは弘安四年五月より七月の末に至るまで、高野山の僧侶が、當時戰場

不動像と鹿島

佛敎史上より觀たる元寇

交通頻繁の

の一部たる筑前國(志賀島)に、高野山南院に安置せる不動の靈像を供奉し來りて壯絶慘絶たる銃聲矢叫びの裡に、平然として熱烈なる祈禱を凝らしたる事にして、元兵全滅の後、西國鎮護の爲めに、靈像の背後に在りし火焰の形を鹿島に留めたるものなるが、昨年木下讚太郎氏の踏査により、該火焰形が儼然として今尚鹿島に存在する事、初めて江湖に紹介せらるゝに至りたり。

文永、建治、弘安の頃、我邦に於て比較的最も能く元國の事情に通じたるは、京都の人士にあらすして實に鎌倉武士たりしは、明瞭なる事實なるが、斯く元國の動靜が鎌倉に最も能く知られたるは、彼此の交通頻繁なりし爲めなる事勿論にして、當時彼國の僧侶の我に渡來して鎌倉に在住したりしもの又我僧侶にして彼國に渡航留學したりしもの頗る多かりしなり、斯くの如く時頼、時宗以下當時の軍略家は、大に宗教家を利用したりしなり、請ふ試み

に當時渡來の傑僧二三と其略歴を擧げん(本朝高僧傳并に元亨釋書に據る)

- (1) 釋道隆(蘭溪)宋西蜀涪江人、寛元四年來朝。時頼問道。弘安元年孟夏歸于福山、秋七月寂。(大覺禪師是也)
- (2) 釋普寧。宋西蜀人也。文應元年來朝。時頼問道。文永二年歸于明州。至元十三年(我建治二年)寂。
- (3) 釋祖元。宋國慶元府人也。弘安二年應平時宗之懇請來朝。創圓覺寺。時宗屢稟教誡。弘安九年寂(佛光禪師是也)
- (4) 釋正念。宋永嘉郡人也。文永六年來朝。時宗問道。移住于建長、壽福圓覺。正應二年冬示寂(佛源禪師是也)
- (5) 釋一寧。號一山。宋之台州胡氏之子也。正安元年來朝。貞時問道。文保元年寂。

時宗と祖元

前記の如く、當時彼國より渡來の僧侶は、何れも宋の遺臣にして、元朝の勃興を憚ばざる輩なれば、日本の武威によりて元の暴勢を挫かん事を熱望したるなるべく、元の内情を探りて我に報告したる事も尠からざるべく、決して我國情を彼に通じたるが如き事あるべき筈なし、就中祖元の如き、元兵の壓迫を蒙りて逃竄し、虜酋が將に白刃を頭頸に加へんとするや、從容として、彼の有名なる乾坤無地卓孤節、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風、の一偈を唱へ、暴戾禽獸の如き元兵をさへ威服せしめ、纒に一死を免れたるほどなれば、衷心の横暴を憤慨する必ず甚しきものありしなるべく、其執權時宗の懇請に應じ、我國に渡來するに當りてや、之を招く者も問道以外に必ず希望劃策ありしなるべく、其招きに應ずる者も亦傳道以外に大に豫期する所ありしや疑なし、佛光禪師語錄に記載する所に據

天兵助順

るに、祖元の圓覺寺に在るや、時宗時々來訪して直指人心の奥旨を問へり、而して其來訪に際しては胸中の煩悶禁する能はざるもの、如く、憂鬱の氣毎に時宗が眉宇の間に彰はれたり、是當時元との外交は愈々危機に切迫し、何時旗鼓相見ゆるや揣るべからざるの秋なれば、大責任者たる時宗其人の胸中察するに堪へたり、祖元這般の消息を知るや知らずや、虚心坦懷、諄々として、至道の無難を語り、妄想煩悶の唾棄すべきを説破するや、時宗之を聽き靡然として悟り、日頃の煩悶を解脱する所あるもの、如く、其辭して堂を出るや、昇堂の時に反し、意氣頗る軒昂せるを常とせり、由是觀此、千載の下尙生氣潑瀾として、能く惰夫を起たしむるに足るべき、時宗の大勇氣と決心とは、實に禪門の指導に負ふ所多大なりと謂はざるを得ず。

元亨釋書卷第八に曰く、弘安四年春正月。平帥時來謁。祖元采筆書。呈帥

曰。莫煩惱。帥曰莫煩惱何事。元曰。春夏之間。博多擾騷。而一風纒起。萬艦掃蕩。願公不爲慮也。果海虜百萬寇。鎮西。風浪俄來一時破沒。初元在鴈山。定中觀音大士現形曰。我將航來取汝。乃示日月二字。元起詣像前卜籤。亦得日月二字。此日爇香作鎖口訣。執筆而成。文不加點。就床寔息。有二人語曰。百萬虜寇。天兵助順。豈不勝耶。元夢中問曰。何爲有此語。對曰。佗日自見。元覺後把筆。於鎖口訣中加八字。曰。箭擲空鳴。風行塵起。先三年。平帥携緋紙乞法語。元書鎖口訣預識。帥不委也。寇平後。帥問曰。海寇風蕩和尚自何先知乎。元笑曰。再過兩年。說與太守。然又鎖口訣中已寫早了。

元國と祖元

願ふに祖元は、宋國慶元府の人なれば、本朝渡來前には元の事情に就て見聞する所尠からざりしなるべく、渡來後も彼國に於ける知人朋友等より、元

の模様を通報し來りし事、一再に止まらざるべければ、元の出師準備が如何なる程度に進捗したるかは、必ず是等の通信によりて、略察知し得たるなるべく、其來攻時期の如きも、必ずしも觀音大士の靈告を待たずして、豫言するに難からざりしなるべし、其時機が期年の内に通るに至り懇切なる警告と策勵とを當局者たる時宗に與へたるは、以て其眞意の那邊に存するかを洞察するに難からざるなり。

日蓮の豫言は空想的

元寇豫言者として喧傳せらるる僧日蓮は、元寇事件の初めなる文永五年より九年前なる、龜山天皇文應元年庚申高麗元宗元年立正安國論を作りて、當時の執權北條時頼に上れり、其論中に曰く、藥師經七難内。五難忽起。二難殘。所謂他國侵逼難。自界叛逆難也。中略金光明經内。種々災禍一々難起。他方怨賊侵掠國內。此災未露。此難未來。仁王經七難内。六難今盛。一難

佛敎史上より觀たる元寇

未現。所謂四方賊來侵國難也。されば日蓮の外國侵入豫言は、自己信仰の立場より、藥師經、金光明經、仁王經等の佛説に準據し、只空想的に外寇の侵入あるべきを豫想したるに過ぎずして、確乎たる事實を基礎とし具體的に豫言したるにあらず、然り而して發言の時機が事件の發生に近かりしを以て深く賞揚するに足らざるが如きも、元寇の具體的豫言者として、予輩は、佛光禪師(祖元)を擧げざるを得ず。

其當時の國民之信仰

元寇の當時、我國民の上下を通じ、士農工商一般に、神佛に對する確乎不拔の信念の充實せるものありしは、顯著なる事實にして、旺盛無比なりし國民元氣の根柢には、熱誠なる信仰ありし事、決して等閑視すべきにあらず、若し神風の感應なきも、彼の凶賊をして斷じて我神國の靈威を潰さしめずとの大決心大抱負は、實に這般強固なる信念より發動したるものたらずんばあ

伏見帝の御願文

らす。

伏見天皇正應元年 戊子正月、後深草上皇石清水八幡宮に献じ給ひし御願文中には左の文字あり。

奉_レ供養_ニ金光明最勝王經十一部中略四佛世尊爲_レ之垂_ニ擁護_一。中略手自染_ニ金字於紺紙_一。寤寐凝_ニ寸丹於十軸_一。是依_下攘_ニ異域之覬覦_一憶_中我國之安寧_上也云云

同年四月二十一日春日社に奉献ありし御願文も亦前記と大同小異なり。

永仁元年 癸巳二月禁中に於て、七佛藥師法を修し、尋で大熾盛光法を修せられたる際伏見天皇御祭文曰

大日本國國主皇帝熙仁。沐浴潔齋歸命稽首敬白。摩訶毘盧遮那如來。三世一切諸佛。中略頃日異國將_レ寇。率土不_レ穩。剩遣_ニ使介_一齎_ニ無禮之書_一。徑乞_ニ

佛敎史上より觀たる元寇

和親。忘不義之誠。蓋遵三王遺制。固禁四夷之所雜。夫熾盛光法者。答三明王之勸願。以必令護持。却異賊之侵亂。以立令降伏。轉禍爲福之勝利。在祈與不祈云於中禁宸居。修大熾盛光法者。斯度殆爲初。中略西鎮皆誇。靜謐之娛。乃至法界平等利益。謹虔云至。早垂感應。敬白。

至尊の御信念敦厚に在す事、代々斯くの如し、臣民の例は枚擧に遑あらず、茲に之を省略す。

結論

要之、予輩は、佛敎史上より元寇を觀察し、左の結論を得たり。

一、當時佛敎徒が國家的社會的に盛に活動したりし事。

二、國民の上下を通じ一般に神佛に對する確乎不拔の信念充實せるあり、國民元氣の基礎を爲せし事。

三、宗派信仰の同異を問はず鞏固に一致團結せしこと。

四、宋の遣臣の僧と爲りて我國に渡來したりし者、我將士の元氣を鼓舞策勵し、大に内助の功ありし事。

五、交通不便の時代なりしに係はらず、通信の敏速なりし事。

僅に一週間にして、九州全部は勿論、京都、奈良、高野山等へ通信を了したる事實あり。

六、彼國より渡來したる僧と我國より彼國に留學せし僧とにより敵狀を聞知したる事。

七、普通の歴史傳記等に顯れざる史實を佛敎史中より發見するものある事例せば元寇當時我國内海の沿岸警備の擧の如きは、普通史上に見る事至つて稀なるが東寺文書中左の如き記事あり。

異賊事。御用心嚴密之間。所被差置相摸太郎時業貞時叙任於播磨國也以前之名於播磨國也。賊船亂入山陽海路之由。有其聞者。隨時業之命。可令致防戰忠之狀。依仰執達如件。弘安四年閏七月十一日相摸守北條時宗花押。寺田太郎入道殿。是恐らくは、内海の沿海警備に關する唯一の文書なり。

八、敵國降伏の祈禱は京都を中心として、南都(奈良)北嶺(比叡)高野山等に於て、最も熾盛なりし事。

九、筑前鹿島の如き戰陣區域に於て、戰役中戰鬪力なき僧徒が、銃聲矢叫びの裡に祈禱を繼續したりし事。

十、敵の戰死者を慰撫に弔慰する事は、元寇當時盛に行はれたるが、是は元慈悲一視同仁を主義とする、佛教の主旨に出で、敵國降伏を標榜せる、八幡大菩薩の託宣に基因せり、されば現今赤十字社の主旨は、我國に於ては上

古より既に發揮せられたるものと謂つべし、醍醐枝葉抄に曰く、元正天皇養老四年。神軍征伐。逆賊滅亡。宇佐八幡大菩薩託宣曰。合戰之間。多致二殺生。宜修放生。諸國之放生。始于此時。今尙八幡宮の祭典に放生會あり、其由來する所頗る深遠なるを知るべし。

豊臣徳川二氏と東西本願寺

西は豊臣東は徳川

京都西本願寺の唐門は、秀吉が聚樂第の門を寄進したるものと傳へられ、有名なる飛雲閣は、其結構より内部の彫刻繪畫等の、裝飾に至るまで、凡て桃山式なるに對し、東本願寺の六町四方の地域は、徳川家康の寄附したるものにして、白書院黒書院等の構造、凡て範を江戸城に採れり、されば一度、

兩寺の建築を觀たる人は、西本願寺と豊臣氏、東本願寺と徳川氏との關係に就き、必ずや一段の趣味と、好奇心を禁する能はざるものあらむ、此關係は實に兩寺の歴史上に、特殊の異彩を添へたるのみならず、明治維新の前後に頗る面白き現象を惹起したり、故に予輩は此關係の由來を追究して、徳川時代の末葉より、明治維新以後に亙り、兩寺及び其末寺信徒の上に發現したる中實の偶然にあらざるを顯證せむとす。

東の分立

抑も東本願寺が分立したるは、慶長七年二月にして本願寺第十一世顯如（光佐）の長子教如（光壽）が、徳川家康の再の勸誘により、家康及其謀臣本多正信等の大助力の下に、東本願寺を創立したり、當時西本願寺主は、教如の弟准如（光昭）にして、准如は文録二年十一月、秀吉が准如の母細川氏（如春尼）の懇望を容れ、教如を諭して強て退隱せしめたる後を襲ふたるものなり。

なり。

大谷本願寺通記に當時の顛末を記して曰く

文録元年十一月廿四日顯如宗主歿。明日長兄光壽自立踐ニ宗主位。母如春尼遣ニ兩使一諭ニ光壽一令下養ニ光昭一爲嗣。無レ答。十二月五日如春尼付ニ本所於光壽。共ニ光昭一隱ニ居北室（中略）豊臣秀吉公。遠贈ニ書光壽及母氏一帛。喪。且諭ニ繼席事ニ云云。二年光壽趣ニ名古屋（在肥前）謁ニ見太閤。言及ニ母未レ授ニ舊文書。十月太閤歸ニ大阪。親問ニ之母氏。對曰。凡受ニ傳法符一者。領ニ法寶等一此爲ニ舊式。先主授ニ符於季子。故潜議レ令下光壽以ニ季子一爲嗣耳。太閤乃檢ニ數傳法符一畢。諭ニ光壽。以ニ母厚情。光壽不肯。於是太閤令下關白秀次奏ニ後陽成帝一命ニ光昭一司事務。時十月十三日。光昭年十七（是年光壽年近ニ四十二）

傳法符の眞偽

此本願寺通紀は、西本願寺系統の者の執筆に係り、暗に光壽に不利なるが如く曲筆したる形跡あり、然れども尙如春尼が、顯如宗主示寂の當時は、其所謂傳法符(遺言狀)なるものを出して、公々然として准如を立つべきを争はず、僅に准如を以て教如の嗣と爲すべきを要請したるに過ぎず、其容れられざるや、更に抗争する事なくして隠居し、滿一年を経過したる後に於て、初めて所謂傳法符を秀吉に示し、廢立を計りたる事實を没する事能はず、此の如春尼の行動と、所謂傳法符の眞偽に就て、古來暗雲濛々として疑團百出し容易に眞相を斷定する能はざる所以實に此處にあり。

東本願寺開祖教如が、其父顯如と不和なりしは事實なるも是は大阪に於て朝命により信長と和睦するに際し、織田氏に對する外交政策として、陽に不和と爲し、教如は顯如の意思に従はず、勸氣を受たる態に取り繕ひ、顯如が

信長と東本願寺

朝命を遵奉して、信長と和睦し、天正八年四月九日、大阪より退去したる後、教如は尙同年八月迄、大阪に在城して形勢を觀望し、謗詐常なき信長の動靜を監守せしめたる實情あり、此父子の不和は眞の不和にあらざる事は、教如が大阪を退きて後、暫らく鷲の森に隠れ、父顯如と同棲したりし事實に徴しても、略其間の消息を察する事を得べし、尋で信長より問者を遣はし、兩人の鷲の森に於ける動靜を密偵せしむるに及び、教如は父顯如と内議の上近江、美濃の方に巡教したる事あり。

是等の顛末は、大谷本願寺由緒通鑑第五卷に詳記せり、今其一部を摘記せむ。
抑も織田信長公本願寺を攻め亡ぼさんと、元龜元年午の九月より天正七年卯の秋まで、十年が間軍術肺肝を碎きたまへども、大阪は要害無双の勝地

にて、殊に諸國の門葉後詰を爲し、諸方の道俗籠城して、身命を惜まず防戦ひける故終に本意を遂げず、依之信長公謀計を廻し、一旦和睦を爲し、兩御門跡を外へ移し、時節を待つて亡ぼすべしと工夫を爲して和談の方便をなし玉へども調はず、其より公卿を談合申されけるは本願寺と數年の合戦勝負を決せず、都近き所の戦なれば、若時の移によらば帝都覺束なし、此故に和睦仕度と存すれども、私に調ひ難く、願くは叙慮に預り和議仕度となり、公卿皆尤と同じ、天正七年の冬より相談ありて、同八年の春奏聞を遂げらる、御執奏近衛關白前久公、御傳奏庭田大納言重道卿、勸修寺中納言晴豊卿也、此三卿大阪へ御下向ありて、信長と和睦を爲し、何方へなりとも立退き、本願寺建立あるべしと勅諭をのべ玉ひければ、本願寺尊使を得たまひ、兩門跡、竝家臣下間、粟津、横田、藤井、八木、

平井等會談ありて云く、信長謀計深き猛將にて先年朝倉淺井も和睦を爲し時を待つて兩家を亡ぼされたれば、此度の和談心許なしとありけれども、普天之下王命背きがたければ、和睦御請の勅答あそばされける、信長大に悦して本願寺を開城し、兩御門跡立退の時分、途中に伏勢を置き誰が仕業とも知れざる様に討て捨て、永く一向の宗門を斷絶して、日比の鬱憤を散すべしとはたくまれける、其比信長公の同朋に、藤野好阿彌といふ人あり、先祖より淨土眞宗也、右の密謀を聞くより胸をざり心さわぎて、宗門永く絶なん事を悲み、法の爲に止む事を得ずして、密に此趣を大阪へ告られける、兩御門跡大に驚かせたまへども、勅使へ和睦の御請爲されければ、今更違變も爲りがたく、さればとて勅を重じ大阪開城せば宗門斷絶たるべし、一生の浮沈今此時なりと、各工夫を廻らし給ふ所に教如上人仰せられしは、尊

不和は本心
にあらず

師は和睦の義王命御請の上に違背あらば朝敵の御名のがれまじ、一先紀州
 雑賀まで御退去あそばさるべし、私は和談の義御相談なしと披露して、
 此城を相抱留るべし、其時仰出さるべきは我和睦し立退所に、新門不同
 心なるは、言語道断の不孝なればとて、御勘當なりと仰ありて、當地を密
 に御開きなさるべし、然ば本門は勅命を重じ立退たまへども、新門不孝不
 忠にして城を渡さずとあらば、信長我を憎む心強くなり、尊師を憤り奉
 る事は薄く爲るべし、殊に信長思慮深き大將なれば、新門籠城なりと聞か
 ば、如何なる謀やあるらむと思て、尊師へ途中の狼藉は致すまじと道す
 がらの御はかりごと、委くの給ひて、本門跡並に家臣、皆此義尤と同じ
 給ひ、顯如上人は四月九日大阪御退去なされし也、云々。
 されば顯如教如父子が不和を装ひしは、權謀誑詐至らざるなき戦亂の間に

秀吉教如の
相續を承認
す

處する、苦肉の自衛策として、實に止むを得ざるに出でたるものなるべく、
 決して其本心にあらずは、前後の事情に照して明かなれば、顯如宗主が長
 子教如の才幹と功勞とを十分に認めながら、何等の嫌疑を要せざる時に於て
 奚ぞ其相續を否認するの理あらむ、況んや天下の形勢尙昇平といふを得ず
 法燈の前途に、幾多困難の横はるを豫想せざるを得ざるの時機に於てをや、
 いかでか年齒正に不惑に近き嫡長を措き、幼弱なる末子に後事を托するが如
 き事あらんや、故に余輩は准如の母如春尼が、顯如示寂の當時に發表せし
 て、其より滿一年後に發表せる、顯如宗主の傳法符(遺言狀)なるものに疑
 なき能はず、況んや如春尼より秀吉の妾婢に請托して、准如相續の件を、秀
 吉に説き込みたる形跡あるに於てをや。
 顯如示寂の當時、秀吉が本願寺新門跡教如、並に北の方如春尼に贈りたる

書状は、儘に教如が正當なる相續者たる事を承認したるものなり。其文に曰く、

門跡不慮儀無二是非一次第絶三言語一候就中其方總領之儀候間有ニ相續一法度以下堅申付勤行無二怠慢一當家相立覺悟様肝要候然者本門跡本房被ニ相移一其方屋形理光院（准如）移北御方相副一處有レ之而可レ然候與門跡理光院引廻母公孝行尤候猶淺野彈正施藥院木下半助可レ申候 恐惶謹言

極月十二日

秀吉御朱印

本願寺 新門跡

又秀吉より母公如春尼に贈りたる文書に曰く、

門跡ゑんかうの事せひなき次第申候はんやうもなく候さりながらよき子たち御もち候へばくはほうじやにて候新門跡そうりやうの事にて候ま

如春尼と秀吉

家康の同情

ま跡をつぎ家のすすけさる様にかくごをされ本坊へうつりいまままでのごとく申つけ新門主りくわうのんをうつしそなたもあいそはれこれありてしかるべく候なをつばねから上に申入候あなかしこ

十二月十二日

ひてよし御朱印

北の御かたへ

然るに翌年八月頃に至り、如春尼の運動功を奏し、秀吉は強て教如を隠居せしめ、朝命によりて末弟准如本願寺の住職と爲れり、是西本願寺が秀吉の恩願を深く感ずるの初めにして、爾來秀吉の西本願寺を遇する頗る厚く、或は書院、門等を寄附し、兩者の關係年を追うて親密を加ふるに至れり。

一方教如は、其意にあらずして、壓迫の爲め遂に隠居するに至りたれども本願寺家老を初め、末寺門信徒の中には、この交代を喜ばず、尙意を運び渴

豊臣徳川二氏と東西本願寺

仰するものありければ、秀吉は更に諸國の僧侶信徒を寄せ付けず、萬事本願寺の下知を受くべしとの嚴命を下したり、餘りに極端なる命令なれば、教如は勿論門信徒にも、不満を懷きたるものありしが、太閤の威勢飛ぶ鳥も落さぬばかりの時なりしを以て、是非に及ばず蟄伏して引籠り居られたり、此時に於て教如の最も有力なる同情者は、政治上の勢力に於て、秀吉の下に壓伏を免れざりし家康其人なりしは頗る面白き關係といふべし。

家康は教如上人を密に伏見の屋形に召し、織田有樂、沼大炊と共に、敷寄屋にて茶を饗し、親切に慰諭する所あり、其より家康は秀吉に説き、教如を同道して引見せしむるに及び秀吉の意も亦解けて、新に祿を贈與せられたり、慶長三年八月秀吉薨去し、同五年家康上杉征伐に向ひ、宇都宮に滯陣するや、教如上人之を見舞はんとて、當時の奉行石田三成に其旨届出たるに、三

秀吉薨去後の變動

成は當時禍心を包藏し、方に發せんとする際なりしを以て、再三之を止めたれども、教如は肯かずして關東に下り、家康を陣中に見舞ひ、歸途石田の爲めに非常の危険と困難を冒して京都に歸り、其後家康關ヶ原に勝て、京都に入るに際しては、教如上人之を大津に迎へ家康大に其智謀を賞し、厚誼を感謝せし事蹟あり、一方准如上人は、家康關東陣中見舞の爲め、三河國岡崎まで赴かれしが、石田より使者を遣はし引止めたれば、見舞を思ひ止まりて岡崎より歸京せられたり、斯く准如と教如とは、家康に對する親疎の關係に於て大なる懸隔あり、故に家康は關ヶ原戰勝後入洛するや、直に其謀臣本多佐渡守と共に、東本願寺の分立を計畫し、慶長七年二月に至りて土地を寄附し大名の二三に命じて其權越たらしめ、遂に東本願寺の分立を實現せり、爾來日本國中に於て、徳川氏の勢力最も能く行き互れる地方の、本願寺末寺門徒

豊臣徳川二氏と東西本願寺

は競つて東本願寺に屬するに至り親藩譜代大名、旗本の領地には、東本願寺の末寺門徒多く、外様大名の領地には、西本願寺の末寺門徒多き状況を馴致せり、現時に及びても、東本願寺の末寺信徒、大阪以東に多く、西本願寺の末寺信徒、大阪以西に多きは是が爲めなり、就中安藝、周防、長門、筑前、肥前、肥後、大隅、薩摩の如き、外様大名の領地たりし地方に於ては、西本願寺の末寺信徒殊に多し。

例せば九州の兩筑地方に於ては、前記來歴の外、尙一層特殊の事情の加はるあり、筑前黒田藩に於ては、西本願寺の末寺約三百五十箇寺に對し、東本願寺の末寺僅に二十四箇寺あるのみに反し、筑後久留米藩に於ては、本願寺末寺は凡て東派に屬し、西派に屬するものなし。是れ黒田藩に於ては、徳川幕府の初年に於て陰に命を下して強て西本願寺に歸屬せしめたる事情あり、

東久留米藩

久留米藩にては藩公と西本願寺法主との間に、意思の衝突あり、藩公大に怒りて、久留米藩内に、西本願寺の末寺門信徒を禁じたる爲め、凡て東本願寺派に轉じたるものなり。

抑も西本願寺が東本願寺の興隆と、徳川氏の跋扈を憤慨し、其勢力を挫かん事に腐心せるは一日の事にあらず、竊に毛利島津等の大藩に結び、乗すべき機会を窺ふ事茲に三百年海内の人心幕府を離れ、尊王討幕の論四方に喧傳するに際し、薩長土肥と共に、蹶然起つて之が實行に努めたるは、固より當然の事といふべく、幕府倒れて維新の大業成り、薩長土肥政事の局面に當るに及び、西本願寺の役僧中、亦長州等より有力のもの輩出し、政事當局者との關係親密なるを利用し、多大の便宜を得たるは亦偶然にあらずと謂ふべく、之に反して東本願寺は、徳川幕府倒れて無事なるを得る筈なく、維新の前後

に涉りて、幾多の嫌疑と迫害を受け、法運通塞の上に、多大の困難と障碍とを免るゝ能はざりき、其結果無理算段を重ね、東本願寺の大紛亂大厄難が、今より十數年前に曝露したるは、實に止むを得ざるの結果と云ふべきなり。

弘法大師の偉業

佛教の日本的特色

弘法傳教大師が、平安朝に於ける本邦佛教史上の巨擘たるは、今更吾人の喋々を要せざる所にして、我邦の佛教に、初めて、日本の色彩を帯びしめたるは、實に兩大師の力なりといはざるを得ず、抑も本邦に佛教渡來の當初より奈良朝に至る間は、日本佛教の原始時代といふべく、只印度支那の佛教を寫瓶傳繼したるに止まり、何等本邦の特色を其間に加味する事なかりき、然

郷里に敬慕せらるゝは難し

るに平安朝の初期に至り、弘法大師が唐より傳へ來り、初めて日本に唱へられたる密教は、即ち日本眞言にして、傳教大師が比叡山上に初めて開創せられたる天台は、即ち日本天台なり、共に支那に於て流傳せる儘のものにあらず、特に日本天台の特色は、密教の玄旨を加味したる點にありて、傳教大師も密教の玄旨に至りては、弘法大師の教を請はれたるものなり、されば兩大師の内特に弘法大師は、本邦佛教に初めて日本の特色を帯びしめたる點に於て、其効績最も偉大なる高僧と仰がざるを得ず、是弘法大師の偉業の第一なりとす。

弘法大師は、獨り宗教家として日本佛教史上に於ける一大偉人たるのみならず、其理科學的知識造詣亦遙に一世に卓越し且つ之が實地運用の上にも、亦天稟の大材能を發揮せられ、始終邊陲を歴遊し、山河を跋涉し、深山幽谷

を開拓し或は道路を通じ、橋梁を架設し、其他萬般の方面に向て、普く經世利民、利用厚生の途を講じ、我國民を裨益啓發せられたること、本邦古來幾多の高僧中第一位に推さるるを得ず。

本朝高僧傳卷第三(濃州盛徳沙門師蠻撰)曰。

讚州里民奏曰。國有萬農池。始自去年。築之隄封。工大民少。成功未期。沙門空海此土人。山中坐禪。獸馴鳥狎。海外求道。慮往實歸。因茲道俗欽風。民庶望影。居則生徒成市。出則追從如雲。今離舊土。常住京師。百姓戀之。實如父母。若聞其來。必倒履相迎。伏請枉之杖錫。令濟其事。制許之。及海至州。不日底績。

之に依れば、弘法大師が、如何に其郷黨里閭より敬慕せられしか、又其土木上に於ける技能の如何に卓越せるものありしかを想像するに足る、特に壯年

にして其故舊より非常の尊重を受くる事は、最も人の難しとする所なればなり。

大師の偉大なる所以

獨り道路、橋梁、治水等の土木のみにあらず、或は形勝の地を相して殿堂を創建し、或は氣象の變を察知し早天に雨を祈りて膏雨を澍ぎ、或は地下の水脈を洞察して清泉を湧出せしめ、鑛泉の成分を驗知して是を療病に利用し又は地層を考究し石炭石油を採取して其効用を示し、時としては讀心術？又は催眠術？を應用して四民を教化信賴せしむるが如き、亦古來幾多の高僧の及ばざる大師の偉業と謂はざるを得ず。今大師傳紀中の數節を摘抜し、之を立證すれば左の如し。

弘法大師が高野山開拓の勅許を奉請せる上表中に曰、

深山平地尤宜修禪。空海少年日。好涉覽山水。從吉野南行一日。更

向_レ西去兩日程。有_二平原幽地_一。名曰_二高野_一。計當_二紀伊國伊度郡南_一。四面高嶺。人蹤絕_レ跡。今思_下上奉_二爲國家_一。下爲_二修行者_一。爰_二蕘荒藪_一。聊建_二立修禪一院_一。云云

又本朝高僧傳第三に曰。

天長元年春三月旱。重奉_二帝勅_一祈_二雨於神泉苑_一。愆_レ期不_レ雨。海_空入_二三摩地_一見_レ之。守敏法師呪_二諸龍_一。接_二入一瓶_一。奏延_二二日_一。告_二諸徒_一曰。池中_有龍。號_二善女_一。阿耨達池龍王之屬也。現_レ形則得_二悉地_一。時金龍浮_レ水長可_二九尺_一。弟子真雅。實慧。真曉。真然等。得_レ見_レ之。餘不能_レ觀。帝敕_二和氣真綱_一以_二幣物_一供_二神龍_一。既而膏雨大_レ澍。池水至_レ壇。霖沛三日。天下皆_レ洽。敕_二加_二優賞_一。河州有_レ寺。龍池久_レ涸。請_レ海加持。清水俄_レ涌。今龍泉寺是也。

本邦各地に於て、清泉滾々として湧出する所、弘法水と稱し、大師の發見に係ると傳説するもの、少くも數千を下らず、其等の中には、後世より附會したるものも固より之無きを保する能はずと雖も、大師が人智の程度尙頗る低き當時に於て、地質水脈を洞察する識見、遙に一世に卓越するものありしは疑を容れず。又氣象の狀況より驟雨の將に至らんとするを豫知したるが如き、或は山相水容より形勝の地を達觀したるが如き、氣象學並に地學の大に進歩發達したる今日に於て、尙幾多専門の學者をして舌を卷かしむるものあり。

又本朝高僧傳卷第三に曰。

嵯峨帝詔入_レ宮。會_二諸宗碩師_一各論_二所_レ習。海_空辯論精敏。帝思_レ見_二所_レ證。海即入_二五藏三摩地觀_一。頂涌_二五佛寶冠_一。放_二五色光明_一。三論之道昌。法相

之源仁。華嚴之道雄。天台之圓澄等。皆見退澁。
と又曰。

海空妙用無方。神異非一。修不動使者法。則身出。火焰。入水思觀。則室內成池。

と是恐らくは今日世人の所謂催眠術又は讀心術の如き。或る特殊の技術を應用したるものなるべし。

弘法大師は斯く理科學的知識と其應用的能力に於て、驚くべき大効績を擧げられたるのみならず、文學及び書畫彫刻等美術の方面にも、亦不世出の英才を發揮せられたるは、廣く人口に膾炙する所なり、先づ文學に關しては、平假名を配列して、今様歌を製作し。佛教の立言を其中に寓し、通俗的に國民を啓發教化し、書道に於ては王羲之の神髓を得來りて之を醇化し、之に本邦

の特色を帶ばしめ、大師流の開祖として、古來日本三筆の一人と仰がる、佛畫又は佛、菩薩像の彫刻に於ても、神品、傑作として世に傳へらるゝもの尠からず、本朝高僧傳に曰。

雕三椽佛菩薩像。徧滿國界。嘗在豆州桂谷山寺。以指向空。寫大般若經。至魔事品。字畫嚴然。現於空中。自此筆翰精工入神。或援三五筆。五行共書。或畫水上。墨痕不滅。弘仁九年。奉勅書大内南門諸額。應天門額掛而見之。應字點瘠。海乃飛筆塗之。毫無斜邪。

以て其入神の技の一端を想見するに難からず。大師は又著述に於ても、一世の豪たるを失はず、即ち三教指歸を初めとし十住心論、秘藏寶鑰、即身成佛義等、合計一百四十餘部、二百二十餘卷あり。

最後に弘法大師と傳教大師との性格及び事業を對照考察するに、傳教大師

は沈着眞摯なる學者教育家にして、弘法大師は淵達明敏なる事業家、經世家なり、故に前者は専門的、割據的にして甚だ地味なれども、其根柢の牢乎として抜くべからざるものあり、反之、後者は多方面的、普遍的にして、頗る派手なるが、其基礎の比較的堅固ならざるの嫌なきにあらず、故に降りて鎌倉時代以後に至り、傳教大師の遺業は枝葉大に繁殖し、禪宗、淨土宗、眞宗、時宗、日蓮宗の如き、新に勃興し、現今に於ても本邦佛教上に大勢力ある諸宗旨は、何れも皆天台の門を出でたるに係らず、眞言は單に一宗として流布せるに過ぎず、經世濟民の事業も、後世に及びては、高祖弘法、偉業に比較すべくもあらず、是恐らくは弘法以後に於て覺鑿眞雅等二三の傑僧の他、高祖の偉業を繼ぐべき英雄の、輩出せざりしにも因るべけれども、其職由する所頗る遠きもの亦無しといふべからず、然れども又他面より考察するに、弘

法大師、信仰の對象として、千載の下尙幾百萬の信徒より超人間の尊信を受くるも、傳教大師は只大學者、大高僧として尊敬せらるゝに過ぎず、加之宗教以外の方面に於て、弘法大師の偉績は萬古不朽にして、遠く傳教大師の及ぶ所にあらず、文學に工藝に美術に光彩陸離として百世を照すものあり、又翻つて宗教上の見地より考察するに、傳教大師の宗教は、萬有を網羅して中道の妙諦に歸納し來るにあるを以て、其説く所頗る高尚深遠なるも、動もすれば、空理空論に流るゝの弊なしとせず、鎌倉時代以後現今に至る間に於ける天台宗の歴史は、能く這般の消息を示すものと謂はざるを得ず、之に反し、弘法大師の宗教は、金胎兩部の説、四曼三密の理等、頗る幽玄を極むと雖も、巧に之を世相實際の事々物々の上に演釋し來るを以て、凡て實行的にして空論にあらず、其世道人心を啓發裨益する頗る多大なるものあり、然

れども往々理論を避け實行を尙ぶの結果、甚しき迷信 陷るの弊なきにあらず、彼の宗教の本旨を誤り妄に現世吉凶禍福を祈りて、種々の危険有害なる風俗習慣を醸成し、爲めに恢復すべからざる災禍を招致するが如き、最も警戒すべき弊害たらずとせず。現今眞言宗徒一般の状況に於て、果して這般の弊害なしと謂ふを得べきか、予輩は大に疑なき能はず、若し斯くの如きものあらんか是明に高祖の眞意に乖き眞言の宗風を汚瀆するものにあらずや

閏年に就て

今年(こゝねん)は閏年(うるごし)で平年(へいねん)よりも一日(いちにち)長いから「鳥兔(うさぎ)匆々(とつとつ)」と云(い)うても一日(いちにち)丈(だけ)は確(た)かにユツクリする譯(わけ)で、トリワケテ目出度(めでた)い年(とし)だから御祝儀(ごしゆぎ)代(しろ)りに閏年(うるごし)の話(はなし)を

しよう。

普通(ふつう)一年(ねん)と云(い)ふは讀者(さくしや)諸君(しよくん)の知(し)らるゝ如(ごと)く地球(ちきう)が太陽系(たいやうけい)の親分(おやぶん)たる太陽(たいやう)のまはりを一(ひと)まはりする時間(じかん)である、是(こゝ)が丁度(ちやうど)三百六十五(さんびやくろくにじゅうご)日(にち)で少しもハシタが出(で)なければ面倒(めんどう)はないけれ共實際(ともじつ)はソ(そ)ー甘(あま)く行(ゆ)かぬので、三百六十五(さんびやくろくにじゅうご)日(にち)五時四十八分四十六秒(ごじよんじゅうはちぶんしよせんろくびやう)三(さん)五(ご)日(にち)、二四二(にじよんに)日(にち)である、それで一年(ねん)を三百六十五(さんびやくろくにじゅうご)日(にち)とすれば四年目(ねんめ)には端數(はたすう)の〇、二四二(にじよんに)日(にち)が〇、九六八(くわんろくはち)日(にち)となつて殆ど一日(いちにち)の喰違(くひちが)ひが起(お)きるから四年目(ねんめ)には一日(いちにち)閏(うる)を置(お)いて一年(ねん)を、三百六十六(さんびやくろくにじゅうろく)日(にち)として此喰違(このくひちが)の無(な)い様(よう)にするのである、處(ところ)が實際(じつじ)は〇、九六八(くわんろくはち)日(にち)で一日(いちにち)より少し(ち)足りないもの(もの)を一日(いちにち)とする(する)のだから、四年毎(ねんごと)に又(また)〇、〇三二(さんじに)日(にち)だけの違(ちが)がある、是(こゝ)が二十年(にじゅうねん)や三十年(さんじゅうねん)の間(ま)にはさほど大(だい)なる違(ちが)ひにはならぬけれども、塵(ちり)も積(つも)れば山(やま)となるで、四百年間(よんひゃくねんかん)には三(さん)、一二(じふに)日(にち)と爲(な)る即(すなは)ち三日(さんか)と尙少(なほすく)しば

かりの喰違となる勘定である、ソコデこの喰違の無い様にするにはどうすればよいかと云ふに、四百年間に閏が百日入るべきのを三日減じて九十七日入れる事にすればよいのである、即ち百年目と二百年目と三百年目とを閏年にする事をやめて平年とし、四百年目丈を閏年にすれば其でよい、例へば西暦紀元千七百年、千八百年、千九百年を閏年にせず平年とし、紀元二千年は閏年とするのである、即ち今より十二年前明治三十三年は丁度西暦紀元千九百年であつた、この明治三十三年を平年と定める事に就いては其より二年前明治三十一年五月十一日に、勅令第九十號を以て左の如き布告があつたに基いたものである。

神武天皇即位紀元年數の四を以て整除し得べき年を閏年とす、但し紀元年數より六百六十を減じ百を以て整除し得べきもの、中更に四を以て整除し

得ざる年は平年とす。

さて西洋紀元年數と日本の紀元年數とは六百六十年の違があるから、右の勅令の通りを西暦でいへば、西暦紀元年數の四を以て残りなく割りきれぬ年は閏年である、但し紀元年數の百を以て残りなく割りきれぬもの、中で割れて得た商を更に四で残りなく割れない年は平年とすると云ふのである。

これが太陽新暦の法と云ふので、西暦紀元千五百八十二年、當時の羅馬法王グレゴリー第十三世が初めてこの暦法を布告した、其より前は歐洲一般に「ジュリアン」暦といふ太陽舊暦を用ひて居た、其暦法は昔羅馬の天文學者ソロンシゼチスと云ふ人が案出したもので、有名なジュリアスシーザーが之を發布したから「ジュリアン」暦と云ふ、この暦法では閏を二月の末日に附加して二十九日とする事と四年目毎に一日の閏を入れる事は新暦と同じ様であるけ

れども、百年目二百年目三百年目の三個の閏日を省く事をせぬから、年を経るに従つて實際と喰違を生じ、西暦千五百八十二年には既に十日の違が出来て居つた、ソコデ法王グレゴリー第十三世は決然として太陽新暦を用ふる事とし、法令を發布して西暦千五百八十二年の十月の四日の翌日を五日とせず、十五日として十日を進め、西暦千七百年、千八百年、千九百年の如き世紀の数の四で割り切れぬ年は平年とする事にした、處が耶蘇舊教を奉ずる國民はこの法令に遵ひ太陽新暦を用ふる様に爲つたが希臘教や新教を奉ずる國民は大に之に反對し、「二週日を返戻せよ」の絶叫は至る處に起り、争鬭を起して人殺し騒動のあつた處さへある、英國では斯かる大反對のあつたにも係はらず、西暦千七百五十二年國會の決議によりて遂に太陽新暦を用ふる事になつた、今日でも露西亞と希臘では尙「ジュリアン」暦を用ゐて居るから、太陽新

暦よりは日の数が十三日後れて居る、我國は明治五年十一月より太陽新暦を用ふる事になつた、さて此太陽新暦によれば天文學上の實地と暦とが大なる喰違の起らぬ様にはなつて居るが、尙數千年の後には喰違が無いとは云はれない、即ち前に述べた通り四百年間に三日と〇、一二日丈づゝ喰違が起るのも三日の喰違は太陽新暦ではなくなつて居るが、まだ〇、一二日の喰違が残つて居る、是が四千年目には積り積つて一日と〇、二に爲るから更に一日の閏を減じなければならぬ譯である、其時にはいづれ更に勅令を公布せられて定めらるゝことであらう、が兎に角其は今から二千年以上も先きの事である、來年の事を云うてさへも鬼が笑ふといふに、斯く二千年先きの話までしたら鍾鬼でも閻魔でも恐らく顛を落して笑ふだらう。「笑ふ門には福來たる」といふから、新年早々誰でも笑う様なお目出度い話を御祝儀の代りに一寸述べて

見たのである。

地球の年齢

年齢推測法

回顧茫茫五千年、人類の歴史と雖も中々短くは無いが、其吾人人類の住所なる地球が、一塊の火の玉であつた大昔から海陸山川形の如く出来上つた現代迄の時間はどの位長い長いものであらうかといふ事は、誰しも時には思ひ浮ぶる事からであつて地球の年齢の取調には、幾多の地質學者が頭腦を痛まして居る随分面白い問題である、其推測の仕方にも種々あるが、今其中二三を擧げて見れば、或は岩層が大氣や水などの作用で浸蝕削剝せらるゝ割合で推究し、又は土砂が水底に蓄積せらるゝ速度を以てし、或は現今地球上熱の

数億年経過

輻射に因れる温度の低下より計算し、又は地球の表皮を形成せる岩石及び其中に化石として埋藏せられて居る動植物の變化より推究して見るのである。

第一の方法により始原期後浸蝕作用を受けた岩石の平均の面積をば假りに地球全体の陸地の三分一と見做し、始原期後の岩石の分量をば二哩の一樣なる厚さを有する地球大陸の面積で表はし、浸蝕の速度を三千年間平均一呎とすれば、始原期以後地層全部の蓄積沈澱には大凡九千五百萬年を要した事と爲る。是は地球上に水成岩が始めて出来てから以來の年代であるから火の玉であつた天地開闢の當初からでは少くも數億年を経過して居ると考へねばならぬ。

七億年以上

次に火の玉時代から現今までの我地球の失熱から物理學者の推算した結果では、大に前の數よりは少くして、地球創成以來經過した年數は二千萬年以

石炭層成生の時間

内だといふ事である。又英國の「グロドチャイルド」氏が化石の研究から古今生物の變化により推究したる所によれば、古生代の初期たる寒武利亞時代から現代まで、約七億年を経過して居るであらうといふ事である。寒武利亞以前の始原代に於ても、既に極劣等の生物は存在し得たに相違ないとするれば、地球の年齢は七億年以上と考へねばならぬ事と爲る。

石炭は前世界の植物が地中に埋没して變成したるものであるといふ事は諸學者の説が略々一致して居るが其石炭生成の主要なる地質時代が歐米諸國では古生代の石炭紀であつて本邦のは新生代の第三紀であるが其石炭層生成の時間に就ても種々の説があつて、厚さ一呎の石炭層が出来るに要する時間は「ハックスレー」氏によれば五百年、「ブツシニヨール」氏によれば三千六百年「フイリツプス」氏によれば一千五百三十年、「クロール」氏によれば千六百年

撫順の炭層

マルチン氏の説

だといふ事である。以上は陸成の石炭に關する説であるが、この外に海成の石炭もある譯であつて、「グロドチャイルド」氏の説によれば、三千年に厚さ一呎の割合と見てよいといふことだ。

石炭紀の大昔と第三紀時代とは、石炭層生成の速さが違ふかも知れぬが是を假りに同様のものと見做し、前記の諸説の平均を取りて、石炭層厚さ一呎を生成するに要する年数を二千年とすれば、六呎炭一層の出来るに約一萬二千年を要した事に爲り、厚さ百四十呎ある撫順の大炭層の生成には無慮二十八萬年の長年月を要した筈である。

「エドワードマルチン」氏の説によれば、地層が蓄積生成せらるゝに要する時間は、時代と場所とによりて固より千差萬別であるが、平均七百年間に一呎の割合と見做す事が出来る。依つて諸種の點を綜合して推究計算した結果

不當の計算

一億歳で中
年

界寒武利亞系	一六〇〇〇	二四〇〇〇	二四	一六八〇〇〇〇〇
ケウイノアン系	五〇〇〇〇	七五〇〇〇	七五	五二五〇〇〇〇〇
原始				
ペノキー系	一四〇〇〇	二一〇〇〇	二一	一四七〇〇〇〇〇
界				
ヒュロニアン系	一八〇〇〇	二七〇〇〇	二七	一八九〇〇〇〇〇
計	二六五〇〇〇	三五七六五〇	一	二五二〇九六〇〇〇

この表によれば第四紀(沖積世、洪積世)だけでも、二百八十萬年の長年月を經過し、第三紀は二千八百八十八萬年を經過した事と爲り、歐米諸國に石炭の厚層の出來た石炭紀は約七千萬年以前に始まり本邦北海道の中部に數十種の「アンモン」介を包藏し炭層の下方に位せる白堊系の生成時代は今より三千萬年を距つる大昔であつた譯である。以上の計算は少しく大に失する嫌がある。

前記の諸學者の説を比較綜合して考へて見るに、我地球の年齢は少くも三

千萬年以上である事は確かであつて三億年内外と想像するが穩當であるかと思はるゝ。而して少年期か中年期か老年期かといへば少年の太陽と老年の太陽(月)との中間にあつて正に中年時代にありといはねばならぬ。三億歳で尙中年とは随分目出度い長壽ではあるまいか。

元日に就て

五千年以前の元日

年の初めを祝ふといふ事は、古今東西を通じ、何の國民にも一般の風習と云うてよい。西暦紀元前三千年頃バビロン人は新年の祭りを「ザクムク」と呼び、一年間の最も大切なる大祭日としたといふ事である。ソレデ一日から十日か十二日頃までも祝ひ遊んだものである。當時バビロン人は、日の神が

元日に就て

年々元日に幾多の神々をバビロン市の或る大寺に召集し、其年内に於ける帝王の運命を初め、一切の出来事を豫の議定せらるゝものと信じて居たから其日には國民一同が、謹んで誠心誠意を捧げて、日神を祭るのを以て各自の聖務と爲して居たものである。

元日のさまざま

斯の如く西洋でも太古時代から、元日は神聖なる大祭日と爲つて居たのであるが、國を異にし時代を異にするに従つて、其日が違つて居て、決して一様で無い、或は十二月二十五日の耶蘇誕生祭を元日としたものもある。又三月一日を元日とした者もある。又三月廿五日を元日と爲したこともあれば、三月二十二日から四月二十五日迄の間にあるイースター(Easter)祭を元日としたこともある。佛國では西暦千五百八十二年、英國でに西暦一千七百五十二年に、今の暦の元日に改めたが、其より以前は三月二十五日を元日として居

つた。即ち元日が春分の頃にあつた譯である。是の三月二十五日を元日とすることは、太古バビロン時代からの習慣であつて、この習慣は春分の時節を以て春の初めとする考へから起つた事と思はれる。東洋に於ても、昔支那では冬至の頃を元日として居つた。

二回の元日

斯くの如く元日は、古今東西、時と處とを異にするに従つて夫れゝゝに違つて居るが、是は畢竟暦が違ふからである。現に太陽暦(新暦)と太陰暦(舊暦)とで元日が違つて居る。本邦でも田舎の方などでは尙古來の風習で、表面は太陽暦を用ひながら裏面には依然として太陰暦を用ひて居る處がある。かういふ地方では、學校や役場など表向きの元日は太陽暦で、内輪の元日は太陰暦で祝ふから、毎年元日の祝儀が二度ある譯で、是こそ萬國に例のない奇妙奇態な現象であるといはねばならぬが、今年よりは太陰暦が曆面から除

明治五年十一月

かれたから、この奇習慣も無くなることであらう。
本年の太陽暦の元日は、太陰暦では十一月二十日で、太陰暦の庚戌元日は太陽暦の二月十日である。又露西亞で現行はれて居る「ユリウス暦」では太陽暦の元日が十二月十九日に當つて居る。即ち十三日の差がある。本邦所用の暦も、昔から同じ暦は無い。明治五年十一月までは、全く太陰暦を用ひられてあつたが、十一月以後太陽暦を用ふる事となつたが、尙民間には太陰暦が随分行はれて居たから、昨年迄は暦にも便宜上兩方の日が記入してあつたが、今年からは太陽暦ばかりと爲つたのである。

改暦

太陰暦はもと支那から傳來したものであるといふ事は頗る明確なる事實で支那では暦は黄帝の時より初まりて、堯舜時代に至つて稍々備はつたといふ事である。本朝往古は如何なる暦を用ひられたか判然せぬが、持統天皇の御

十三度の満月

時に南宋の元嘉暦を用ひられたといふ事が史に傳はつて居る。其後聖武天皇の御代には、唐の儀鳳暦といふのを傳へられ、淳仁天皇の御代には一行禪師の大衍暦といふのが行はれ、清和天皇の御時には、宣明暦が採用せられ、其後八百二十五年間は改暦が無かつたが、貞享二年、寶暦四年、寛政九年、弘化元年等幾度も改暦があつた。

斯く改暦がある毎に、元日が亦かはつて來た譯である。然らば太陰暦の元日は、年中如何なる時節 在るか、太陽暦の元日は、如何なる時節に置かれてあるものかといふに、今も太陰暦は、太陰(月)の盈虚を本として作つたものであるから、毎月朔日が新月で、十五日が満月と大體に於て決つて居るが一回歸年間には十三度満月があるから、太陰暦の十二ヶ月、即ち三百五十四日か又は三百五十五日かを一年とするときは、太陽暦の一年、即ち地球が其軌

元日に就て

立春と元日

道を一週して再び當初の位地に到る迄の時間三百六十五日餘に對して、少し足らぬから、凡そ三年一度づゝ閏月を加へて是を補ふ様になつて居る。

そこで立春といふ季節は、太陽曆では毎年二月五日頃(か)に當るが、太陰曆の正月元日は、この數日前に爲つたり、又は數日後に爲つたりする。故に年の内に春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ。(在原元方)

といふ歌が出来たのである。併し太陰曆の元日は、大體に於て立春の季節に接近して居るのであつて、立春の日が恰も元日に當るのが、其理想であることは、左の古歌に徴しても明かである。

春霞立てるを見れば、新玉の年は山よりこゆるなりけり。(紀文)

昨日こそ年はくれしか春霞春日の山にはや立にけり。(山邊赤人)

春立てあしたの原の雪觀ればまたふる年の心地こそすれ。(平祐舉)

元日の作り方

元日と七曜

次に太陽曆は、太陽を本として作つた曆であつて、年の初めを如何なる處に、置くかといへば、楕圓形を爲して居る所の軌道上に於て、地球が最も太陽に近き處、即ち近日點(Perihelion)にある頃を年の始めとするのであつて元日は十二月三十一日の真夜中に始まるのである現今世界文明國は、大抵皆この太陽新曆を用ひて居るから是等の諸國では、元日が一致して居るが、前に一寸記載した通り露西亞ではユリウス曆を用ひて居るから元日が十三日後れる、又支那では太陰曆を用ひて居るから今年の元日は二月十日である。

さて最後に、元日と七曜との事を一寸述べやう、平年は三百六十五日で、恰も五十二週と一日であるから、一年の元日と大晦日とは、必ず同曜日で、翌年の元日は、前年の元日より一日進んで行譯であるが、閏年は一日多いから、其翌年の元日は、前年のよりも一日進んで行く事に爲る

元日に就て

それで明治四十二年の一月一日は金曜日であつたが、四十三年の一月一日は土曜日で四十四の一月一日は日曜日となるのである。

信仰の妙味

近來の傾向

近來我國のあらゆる階級に於て、修養の事が盛に叫ばれ、宗教の事が重んぜられるやうになつたのは、國民全體の心の上に眞面目にならふ、誤魔化されずに進まうといふ自發的の心持が芽を吹きかけて來た證據である。日本の歴史でいへば、奈良平安朝の時代が過ぎて、鎌倉時代が來た時とよく似た趨勢である。

大正と鎌倉時代

即ち奈良平安の時代は、全盛の唐の文明を輸入した結果、一方では文物

然として輝いたやうであつたが、國民の氣象は一般に文弱に流れてしまつたその文弱な時流に一鞭入れたのが頼朝であつて、その荒しい時代の變化に國民の惰眠は破られたのである。言葉を換へて言へば國民の自覺時代、反省時代であつて、その結果國民の精神が大に充實し、元氣が溢れて來たので、蒙古軍粉碎などの大事業をも成し遂げる事ができたのである。

明治に次で起つた大正の時代は、順序上國民の自覺時代、反省時代でなければならぬ。物質文明は結構なものには相違はないが、精神文明を無視した物質文明は決して長続きするものでなく、さうたいして謳歌するほどの價値もないものなのである。

生花と修養

云ふ迄もなく精神修養の問題が八釜しく云はれるやうになつたのは、結構な事であるには違ひない。しかし若しその方法を誤つたならば、水だけ吸う

て居る生花同様間もなく枯れてしまはねばならぬ。つまり姿もお詔へ向きに出來て居り、花と葉の釣合もよく出來て居るやうではあるが、クバリが緩めばその姿も釣合も見苦しいものになつてしまふ。

生花が枯れるといふ事は根がないといふ事と、水だけの養分しかないといふ事なのである。あたは花や枝を、生花にするといふやうな事を止めて、自然のまゝに生長せしめ、側から醜い處を少しつゝ矯め直すやうにするならば數年の後には生花以上の姿や枝ぶりを見る事ができるのである。

根のないといふ事が、生花をして永久的生命を失はしめる唯一の原因である。修養の問題でも同様いくら外からくばりをかけても、根のない方法を用ひて居るなら、決して最後の目的を達する事はできない。修養の根となるべきものはさて何であらうか。

修養の根柢

私の考へでは修養の根柢は信念であるといふ事に歸着する。世の中の人々は信念をさへ得るならそれで人世のある役目を果したもののやうに考へて居るけれども、孔子なども、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりといつて居るけれども、信念を得たからといつて、必ずしも能事了れるものではない。否、信念を得てからが眞の人生の第一歩が始まるのである。

鎌倉時代が歴史上重んぜられるのは、その時代の國民が、信念に充實して居たからである。獨り武士の階級ばかりでなく、あらゆる階級を通じて信念に満ちて居た。それ故文武兩道に於て最も意義ある文明が輝き渡る事ができたのである。わが大正時代に住む國民は、この點に於て大に自重して進まねばならぬ。即ち第一に信念の充實を計り、其根柢の上に立つて修養の道に進むやうにしなければならぬのである。

信念の必要

すべて何事にも信念は最も必要な事柄である。譬へば實業の上に於ても信用は第一の資本である。信用がなかつたならばすべて取引を敏捷に且つ圓滑に行ふことは出来ぬ。醫者が病者をなほすに當つても、最も大切なることは患者は醫者を信じ、醫者の言葉をよく守る點にあるのである。此心が缺けてを一つは、如何に名醫にかゝり薬を多く飲んでもそれで病氣は全治せぬ。時によると却て醫者にかゝり過ぎて其療養の道を誤り、或は種々の薬をのみすぎ却て病氣を重くすることがある。一家庭の中に於ても家庭の人が相互に信じ合ふことによりて、始めて其家庭の風波が立たず圓満に樂しき家庭を作ることが出来る、互に信することがなかつたならば、所謂疑心暗鬼を生じて、平地に波瀾を起し平和であるべき家庭は常に暗闘の絶えぬ様なことがある。此の如くすべてのことに信念が必要である。教育に於ても生徒は教師を信じ

信仰の妙味

教師は生徒を信じてこそ始めて教育の効果が擧がるのである。互に疑ひ合うてを一つは教育の出来る筈がない。

精神の修養上に於ても信念なき修養は、油をさすして車輪を動かす様なものである。必ず摩擦によりて熱が起り圓滑に車を運轉することが出来ぬ如く、種々なる障害を生じ修養の實を擧げることが出来ぬ。こゝに於て修養を心掛ければ心掛くる程苦しく窮屈に感ずる様になり、或は神經衰弱を起し、或は憂鬱性に罹りなごして愉快に修養の道に進むことは出来ぬ。然るに宗教の信念を味ひ其信念の妙味が自然に修養の上に力を與へて來る様になると、窮屈の思ひをせず苦しい感じもなくわれ知らず一步一步と信仰の妙味を味ひつゝ修養の道に進むことが出来る。これが人間の最も幸福な心掛である。昔の人が「人事を盡して天命を俟つ」と云ひ、禍も幸も眼中におかすして唯

人生の至幸

人の人たる道を進むことを努めたのであるが、此等も信仰の妙味からなれば、氣の毒の感じがある。如何となれば天命とはどんなものか分らぬ。けれど人事を盡さねばならずとあつては、頗る壓制的の意味がありて甚だ窮屈で且つ苦しいのである。故に自分では人の道を盡してをるにも拘らず、不幸が續出し、又他人の中で顔回の如き立派な人が不幸を重ねた事蹟を見、幾多の不善の人が暴戾殘虐の事を爲し盡しながら、猶安樂に平和に榮えて行くのを見ると、如何にしても天道是非かとの歎きを免るゝことが出来ぬ。

かく見れば人事を盡して天命を俟つと云ふ精神は、頗る見事で此心を以て立派に修養が出来得る様であるが、其實際は必ず不平百出で修養に非常な苦痛を感じるに違ひない。楽しく人事を盡すが如きことはとても望まれない之に反して深く自己の罪惡を自覺し、此罪惡を持餘した結果遂に佛陀の慈光

佛陀の精神

を仰ぎ、其救濟の恩光に浴して大安慰を得て、抑へきれぬ感謝と、歡喜とが胸に溢るゝの結果深く自己の毎日の生活に懺悔して、その懺悔と感謝の心より廢惡修善の道に進み、所謂修養にいそむならば何等の不足もなく、又何等の苦惱もなく聊かも窮屈を感じることもなく、自己は修養しつゝあると云ふ如き社衲きた様な心すら失せて、任運無功用に修養の道に進むことが出来るのである。これは實に云ふに云はれぬ信仰の妙味で、人生の最大幸福はここに存在すると思ふ。

此精神は實に富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざること其境遇は順境であるとも、逆境であるとも、得意の時も失意の時も貧富貴賤に論なく一様に味ふことが出来る始終一貫する所の一大精神である。これ實に天命を樂んで人事を盡すもので、一步一步が満足であり、圓滿である。此精神が徹

底すれば無爲涅槃界の證に到るべきことは毫厘の疑を容るゝ餘地がないのである。かの信念が充實せずして如何になるか分らぬ天命を俟つと云ふ人事の盡し方とは、同日の論ではない。世の修養に志す人は先以て眞面目に自己を省察し、佛陀の慈光に浴し眞實の信念を得て、其信念の妙味の流れ出る所修養の道に進まるゝ様になるならばそれ程の大幸福は又とないと思ふ。國民の全體が此の如くなつたならば、我國文明の光が世界を輝かし其恩澤を遠近に遍く及ぼす様になることは些の疑もないことで、かの鎌倉時代の我國民の元氣 大に發揮せられた以上に、世界に國光を宣揚することが必ず出來得ることと思ふのである。

理想と現實

世相の兩極

今の世の中の状態を見るに種々の事柄がある。或は理想派現實派に分れ、或は保守黨急進黨に分れ、理想派や保守黨急進黨にびつたり合はねば、又種々分派を生ずる。又實業にても蠻襟高襟兩黨に分れ、其他種々に分れる傾きがある。又教育にも軟教育硬教育あり、其の方法にも注入と啓發の二法があると思ふ。又他の方より強く苦しめると柔かに育てると二つの方法があり、何れに傾くも悪いが、今の教育は柔かきに過ぎては居ないか。生徒の頭腦を費さず育て、貫ふは實に有難い事であるが、餘り柔かに育てられると、或は自然に自己の消化力を減じはせぬか。私等の子供時代は盛にグン／＼やら

理想と現實

れたもので、生徒の腦力使用などは少しも考へずやられて居たが、時には不消化物をもやつて弾力性を養ふ事が必要であらう。即ち衛生許りに注意して居るものは體が次第に弱くなつて弾力性を失ひ、病氣になり易い様なものである。即ち今日にても教育の方法にも二通りある様である。又流行にも高襟蠻襟二通りあり、家庭にも家族主義と個人主義に分れる。その何れに偏るも悪く、葛藤が生じ、老人は家族主義を主張し、若き者は個人主義を主張し、兩者相下らず風波は常に絶え間がない。此れは識者が大に注意すべき點であらうと思ふ。演劇にも史劇と寫實派とがあり、大別して此の二つであると思ふが、現實を寫すはよい點もあらうが悪い點も多くある。故に此れを子供に見せてよいか悪いかと云ふ問題が起つて来る。史劇は多く教育的の意味を含ませられて居るが、今日最近に上場せらるゝ寫實主義には不健全の分子を含

む事が多い。例へばカチニューシヤ劇の如きは、分つた人が見るのは悪くないが然らざれば悪い。彫刻にも又二つの主義あり、理想派（細微に拘泥せず粗にして精神を寫すもの）及寫實派（精緻を主とするもの）の二派あり、繪畫にも昔もさうであるが一筆で風韻を持たせたものと、細に寫生的に書いたものがある。又文藝にも一方には教訓を第一とし世道人心を益する爲めに作るものあり、他方には自然主義がある。教訓派が理想派なれば自然派は現實派である。一方言はすれば文藝も藝術であれば、必ずしも教訓を諷せねばならぬと言ふものでなく、其れに捉はれる事は不可ぬと言ひ、又一方は文藝も裨益する所なくては何の價値もないと説くのである。又道德家にも在來の道學主義に依るものあり、又一方には自然主義を主張するものがある、自然主義者は大將には大將の道德あり、士卒には士卒の道德があると言ふ。此れも大

別して二つに分れる。一方は理想派で一方は現實派である。哲學も亦唯神唯物の二派がある。一方は神に引き付けて悉く解釋せんとし一方は物に引付けて悉く説明せんとして居る。昔より哲學には此の傾向が現はれて居た。オイケン、ベルグソンありタゴール出で理想と現實の二派に分れて居る。政治にも矢張り保守進歩の二黨あり、今日日本の政黨も二つに分れて居る。又宗教も同様で未來主義及現世主義の二つに分れて居る、基督の如きは未來主義にして又淨土も未來主義であるが、佛教の中にも樂道に屬する華嚴天台禪宗の如きは現世主義である。以上の如く教育政治文藝家庭その他何れもこの二つの主義に分れる様であるが、これは何れも長短がある。若し短所が現はれて來れば非常な弊害となるものであるから、各其の缺點を他山の石として何れも他の惡を捨て善を取り合はねばならぬ。

中道主義

これが即ち中道主義である。

この中道主義が眞理であつて穩健である。一面平凡の様であるが然し偉大である。自然の現象は平凡の如くなれども偉大である。平凡なるが故に平穩であるが、若順序を誤れば即ち大變である。又自然を眺めるにしても風景のよい所は文人墨客を樂しましめるけれども少しも國家の富にはならぬ。國家の富は極めて平凡なる平原に生ずる。肥筑の平原の如き何の賞する所もないが、米が出來其他の産物が出來市街が出來て國家の富は此に生ずる。又ある極平凡なる景色の中に石炭があり石炭のある所は多く平凡にして、其の中より生ずるもの全國にて約三億圓(二千萬噸)にして九州は其の大半を占めて居るこの大なる富は全く何の奇なく景色なく平凡の所から生ずるのである。堯舜は舜に中を取れと教へ、舜は禹に中を取れと同じく教へて居るがこれは穩健

佛教の中道

にして理想的である。この中道と言ふ事は佛教にても勸めてある。法相宗天

台宗にては

中	假	空
観	観	観

と云ふ事がある。世の中を一切空と見るもの、又萬物を假のものと見るもの
 或は空にもあらず假にもあらず中間のものであると見る三つの觀察がある。
 其の中中道は最もよく又理想的であると天台宗では説いてある。更に進んで
 多くの宗教を研究して見ると何れも一方に偏するのを嫌ひ、偏せざるを極意
 として居る。儒教も中が極意で中庸と云つてある。佛教もやはり中である。
 この中は理想と現實とを中和したもので、この兩者接近し調和して中が出來

逆境の力

たものである。其れが離れなくなつて居ては何の價値もない。

又お互の精神状態を考へて見るに、修養に入る時順境と逆境とに依つて異
 る。順境の者は現實に傾き逆境にあるものは理想に捉はれる。従つて順境の
 者は理想を失ひ、逆境の者は現實を失ひ、文章を書いても逆境にあるもの、
 方がよい。これは理想、高いからである。従つて順境に入れば理想を失つて
 來るのである。例へば今日熱い日に於て逆境にある者は理想派となり、裏長
 屋に住む者は避暑に行かれず、現實を無視して理想に走るのである。又同じ
 境遇に人が石炭鑛に従事するにしても、一方が巨萬の富を得た時に現實派と
 なり、實際に儲けなければつまらぬと言ひ、戦争も金があつての話して空論
 は何んにもならぬとて、遂に裏長屋時の理想を失つて仕舞ふ。政治上に於て
 も野にある時は理想を説き、政府に入れば是が非でも議會に多數を占めねば

ならぬと言ふ。それが一方に偏すれば悪く兩者は互に相調和する如く計る事が大事であらうと思ひ茲に此の題を出した。

一體失敗をするのは得意失意何れの時代にもあるが、得意の時代の場合に多く油断が出るので逆境よりも順境に於て戒めねばならぬ。此れは自然界に於ても同様で、月蝕は必ず満月の時にある故に十分に満ちた時が危いのである。充分に満足した時、何等かの禍因を蔵して居るものである。此れを個人國民社會國家の上より見ても同様である。曾て伊藤井上兩氏が維新當時洋行から歸つて來た時、毛利公初め藩中の面々は此れを迎へて高説を聞くことにした時兩氏は非常に喜んで得意になり、洋行視察の状況等を演説したが、夫れより家に歸つた時高杉晋作氏が來て其の話しを聞いて、それは大變だ首がない早く逃げろと勧めたので、二人とも逃げ仕度をして逃げ出すと、案の如

伊藤公と井上侯

宗教と逆境

く兩氏は道に要せられ伊藤公は幸に怪我なく逃げ了せたが、井上侯は遂に傷つけられたのである。此等は得意の時己に禍根があつたので人は順境の時最も注意すべきものである。順境は樂觀にして逆境は悲觀である。

宗教其の他に對しても、順境樂觀にある人は此れを利用せんとし、説教も修養談等も聞いて置けば何時か何かの爲めになるであらうと云ふ具合に聞いて居るので、此れを聞いても其の道に入る事が出来ない。法然聖人が言はれた如く此等の人は一心専念でない。だから心に隙があり油断がある。晝寝するより増した位に聞いて居ては、聞かざるも同様である。然し逆境悲觀失意の時代にあるものは何一として面白い事もなく、昔親しい友達も今は手紙も呉れず、親戚さへも近寄らず、更に發展せんとすれば體が悪く、自分獨りは全く世の捨物であると感じた時に、其の境遇を脱せんとするの念切なるが故

に、宗教等を聞く時の態度は違つて居る。決して浮いた上調子のものでない宗教に依つて安心しよう、徹底せねば止まぬと言ふ覺悟を以て聞くので、彼の親鸞聖人が建仁元年の春の頃、非常の悲觀逆境にありて六角堂に參籠し、南都に尋ね、尙迷解けずして唯命が繼がる丈けとなり、尙道を求むるの一念が頗る強かつたので、爲めに法然聖人一席の法話に依つて全然信仰が徹底した。又熊谷直實が法然聖人を尋ねて、其の教を受けんとした時も同様に、逆境にあり悲觀の境遇にあつたので、非常に決心し、法然若し我が迷を解き得ずんば彼れを殺し我れも共に死すべしと、窃に短刀を懐中して行つたのである。従つて眞面目で没頭的であつた故に信仰徹底し、熊谷も法然聖人の如く完全に信念の域に進む事が出来たのと同様である。

斯く觀すれば凡て逆境の方がよい。順境にある人は眞面目にならずして、

浮か／＼浮いて居て、深く沁み込まない。立派な教があつても、心に收穫する事が出来ぬ。故にこれを求めんと欲せば須臾く没頭的でなくてはならぬ。唯批評的に此を求めたならば其の收穫は完全ではない。故に昔より求道者の要件として、虚心坦懐と云ふ事を云つてある。若し没頭的に進み、熱心に求めたならば、阿彌陀これより遠からずと言つて一度眞面目に佛に向つたならば阿彌陀は眼前にあり、如何なる人も道に入る事が出来るが、要は凡て心の眞面目なるにある。

白隱の機智

東京の小石川に白山と言ふ處がある。住持は白隱と云つて極めて質素に生活をして居られたが、頗る眞面目で修養の出来て居られた人だが、一日帝國大學の大先生達が一つ遣り込めてやらうと云ふので白隱の所に乗り込むと、白隱和尚は極めて質素な衣服を着け出て來られ、一室に招じて先づお茶でも

愚禿

と言ふので、白隠和尚手づからお茶を出したが其の注ぎ様が面白い。茶碗に一杯になつてもまだ和尚はどん／＼注いで、如何にこぼれても尚注いで居られるのを見て、大先生達は「否やもう澤山です」と言ふと、和尚徐に「澤山だ」と云ふ人が、何故教を求めに來られたか、已に貴殿方は立派に研究もして居らるれば一杯になつた茶碗も同様である者。教を受けんとすれば、先づ其の器を空しうして來られよ」と言はれたので、大先生達も返す言葉がなく、這ふ／＼の體で立ち去つたと言ふ事である。早や一杯になつて居るのに、尚入れると云ふ事は困難である。故に入れんとすれば其の器を空しうする事が必要である。従つて教を求め道に入らんとするならば愚である事が必要である。昔より「聖なるは愚に似たり」と言はれて聖人君子は一見愚者の様であるが、これに至つて立派な修養が出来るのである。故に親鸞聖人は自ら愚禿と

號して愚禿なるものを書いて居られる。

愚禿鈔曰、

聞賢者信。顯愚禿心。賢者信。

内賢外愚也。愚禿心。内愚外賢也。

これは法然聖人の教を受け、其の人格を推賞したるものにして、賢者の信は法然聖人を指し、法然の信を聞いて自分の愚なるを知り、法然の信はごうして現はれるかと言へば、内賢にして外愚である故に、愚夫愚婦と變りはないが、愚禿は内が愚で、外が賢に見ゆるので、こんな事ではならぬと自ら慚愧せられたのである。斯の如く昔の求道者は頗る眞面目であつたが、外は如何にも愚者の様であつたのである。今の人は外は偉さうにして居るが、内は愚である。故にもつと今後は愚者なる者が出來なくてはならぬ。親鸞が愚禿と

名けられたのは實に感心の至りである。今の世は賢者のみ多くして、愚者が少く、これからの教育はもつと愚者を養成し、徳を養ふ如くしたらば頗るよいと思ふ。故に修養は智と共、愚を養ふ事が大事で、要するに自分の愚である事を知り、知ることが必要である。吾等は眞に愚なりと信じて發達し、親鸞も愚なりと悟つた爲めに偉くなつたのである。東郷大將は曾て日清戦争で高陞號を撃沈したが、これが戦争の初で、當時海軍大臣は西郷從道侯であつた。右の事が聞えるとは皆はごうも東郷はあんな無法な事をするから困ると怒つた。從道侯はあれは馬鹿だから仕方がないと別に怒りもせず、却て愚なる東郷を厚く任用されたのであるが、今の人は愚さへ養ひ得ないので、況んや賢をなす事は尙六ヶ敷いのである。今日の教育は愚者を作つて行くが必要で、又愚を養ふ事が興味ある事である。又書經に

滿招損。謙受益。

とある。ごうも順境が危険で、謙にして馬鹿者が常に益を受くる。これは最も適切なる教訓であらうと思ふ。易經に

天道虧益而益謙。地道變盈而流謙。

鬼神害盈而福謙。人道惡盈而好謙。

故謙之一卦六爻皆吉

斯の如く謙は凡て吉である。然し謙を現はす事は困難であるので、稍もすればこれを離れる傾きがある。故に修養をするにも宗教に入るにも先づ第一に此に心を注がねばならぬと思ふ。

以上種々話をしたが、要は自ら正しうするが、修養の第一歩で、最後の目的は理想と現實を調和させ中道に導かんとするのである。又明の進士袁了凡

自己を正し
ぐせよ

の書いたものに

陰陽録曰、

造命者天。立命者我。力行善事。

廣積陰德。而又加意謙謹。

以承天命。何福不可求哉。

世の中には手本となるものが澤山あるが、これは袁氏の経験である。その中の一句であるが、大命を立つるものは我であり、善事を行ひ謙謹の徳を養ひ、天命を受けて行けば、自然に幸福になると言ふのである。この袁了凡氏は曾て易者に見て貰つた。易者曰く短命薄倖の相にして試験も及第せず、命も短いと言はれたので、同氏も痛く落膽し更に先輩を尋ねて吾が不幸を物語ると、其の先輩は否やさうでない、假令短命薄倖の相であつても、天命を知

り恭謙にして修養を怠らなかつたならば、幸福必ず至ると言はれたので、其の言を信じ其の如く努めた。後更に易者に見て貰つた時は、即ち短命の相は長命の相と爲り、試験も及第すると言はれたとの事である。恭謙は道に入るの第一歩なり。

下る程人の見上る藤の花

藤の花は下る程人に賞美られる。吾人も恭謙の徳あつて始めて人格が出来法然親鸞も愚となりて益々其の人格は上つたのである。

以上は實際上の話であつたが佛教の教にも同じ様な戒めが澤山ある。曇鸞大師著往生論註に

往生論註曰、

眞智無知也。無知故能無不知。

慚慢と憍怠